岷江入楚

総角

角総　　私〻総角とよめり是巻奥ニ注之

廿三歳　　中納言　私推之同年　此秋より冬まての事

秋宇治八宮一周忌法事之事

源中納言訪宇治給事

名香糸角総事

匂宮御方向給申姫君許事

弁於老人物語事　今夜留宇治給了

姫君対面之事　暁帰給事

明日源中納言贈文於宇治事

姫君除服事

源中納言渡宇治弁例老人物語事

姫君思強事

其夜宿宇治老人引導源中納言奉入姫君寝所事

姫君起屏風陰事

朝源中納言奉文於姫君事

姫君返及亦事

源中納言参兵部卿宮語宇治更行事
兵部卿宮又誘引源中納言行事
八月廿八日彼岸結願日源中納言奉伴兵部卿宮於宇治事
源中納言姫君物語事
匂宮於行之由語行事
匂宮忍入中君寝所給ふ
源中納言之まろね給ふ
暁天源中納言匂宮同車還京給ふ
明旦匂宮御文送宇治中君給ふ
御使賜衣給ふ
宇治中君三ヶ夜餅事
源中納言送消息於中君事　五庭守
及深更匂宮参宇治行事　家司らまうく
九月十余日源中納言奉伴匂宮於宇治給事
兵部卿宮欲渡中君於京之事
源中納言又欲渡姫君於三条宮事

此夕霧れたこと右れおもひとのこまひおそく誤り
左大将ハ給ひて後の事也　右をかへすやまとなり（云也）
十月一日兵部卿宮為紅葉御遊逍遥宇治事
舟楽之事
依中宮仰右大臣御参御迎事
宮欲御文於中君事　不於宇治更返京給ふ
姫君中君不兵部卿宮無御後恨行事
内中宮とゞむ兵部卿宮宇治依思行御学文之悪数事
左大臣女六君嫁兵部卿宮給事
兵部卿宮兼女一宮御方見在五絵給事
兵部卿宮久不出宇治給ふ
源中納言参宇治行事
姫君病脳無対面事
明日御対面帰給事
中君昼寝之夢見兵部卿宮給事
十月廿日兵部卿宮欲消息於宇治事

十一月姫君病悩同卒事
訪源中納言給事
仰阿闍梨祈事
阿闍梨夢見故宮為追善行常不軽行事
源中納言与中君詠哥事
源中納言詣宇治給了
匂宮京更給事　　物語姫君事
宇治姫君卒去事
同葬送事　　中納言恋慕事
兵部卿宮中陰之中渡宇治給了
匂宮宇治事　　中君帰　物見衆了
源中納言年逢物語事
明日兵部卿宮還京給事
年暮源中納言歎悩間事
兵部卿宮可移渡中君於京二条院用意事

角総
以歌并詞為巻名　秘同
あけまきになかき契をむすひこめおなし所によりもあはなん
私釈にはあけまきをむすひこめなとやうにもいへるにて[illegible]
源氏のうたをそなへたり
あけまきに二河より童をもあけまきといふ髪をゆひたるにおなし
[illegible]又車のうちにすたれをかけて[illegible]源氏の[illegible]
[illegible]源氏のうたにはいはれを[illegible]といふへし
薫廿四歳の秋よりまて[illegible]なり[illegible]源氏卅二より
総角とかけり童の名にて催馬楽には角総とかけり是は同字也
といへり此巻名は催馬楽にみえたり薫廿三歳秋よりまて
まてなるへし　矣
私云天曽御元服前時童形にて[illegible]御総角と云
是も童の名[illegible]河海花鳥呉花此巻の名総角と用より
此物語に角総を用不審
吳さるほとに[illegible]なれは[illegible]事は此巻の秋より
○冥[illegible]なりけれは[illegible]の[illegible]

わかきともしうれしのひめし何風もこれ秋をいかなしきすく
秘 弐文字ハ御年ふたとせを経ぬれども八宮薨し給ひしさいに
とゆかしき給ふなり
箋 薫の気色ハかゝる事なれども、これかへりて宮のうへをおもい
給ひしハ清ましくもみえぬ
御そのかたいそがせ給ふ 秘 八文一回忌の事也 箋
うるはしくの文書きて八月廿日にいそがせ給ふべし 周忌の仏事
まへなきを御そのめてたきはいへり 箋 宮の御事也 袈裟
けふにまうけのくの事 経のかざり
衣経なとの事なるべし 法事ハ八講なるべし 経のかざりハ
経机花瓶なとの事なり 紫上をいかゞり おなしく
きこゆるにさるかひなく
あやうけなきまうけハ人のおもひよりてもにをし 秘 薫の心の内ハいとし 箋
くるゝまそれ御かうし語 薫の宮にへおもしろし
みつからも御心なくてまふて
今はとぬきそうて給ふへきかつらひ

箋
兼勝とめて在のまに付の事し
私若衣の文にあらはれのまにあふの衣裳のまゝにて出座り給
なかへし文その布との御おさきをとられてゝかひて給
とゝのりれいとをあをやきのやみなりて　名を糸し行香の机に
角ま結ひ置きし糸し　さし絶ゝれとを紙につかんとて文字まて
むすひつけて仏の前におく事し
私名を糸まて結ひつけて不可然の河説の秘の名を
つゝみうる紙をも糸まて結ひつゝし　又云名を代衣小糸を付る
事あり又河海ま在り
箋
河海花鳥の義各別に相河説よしとし花足の仏前まて
はく各糸なるへし
くてをはめるをとりいらゝひ
さしのをものなれはかくてもはめる物ともまうか　河古
糸の縁あり縁し引なるとうしと　成とうしと　おまつま
奥
秘
引奇同し婚姻進らくいひくうらかうしひのふれふし
中糸とうらつゝしひのまへ婚姻事にまさこと有り　箋
むすひ河のこと名をまれ
万十二
乙女子らうゝをのこまにうらとけり世時すにこひさかも
延喜式に絲柱と書て糸まとまめり糸をよるらくかもし
糸をとる名義し絲柱とよめり名まま糸をとりく河抱之と云と
たてれ字まて読む一巻合点　名まめさ毒か廿人糸をとる
物し若鳥に延喜式をかきり来歟し　河　糸をとりく河抱し
令神祗令第六云　凡天皇即位其大幣者三月之内令修理訖
註云　金水桶金絲柱奉伊勢神七日
そめいとくはらく
まろ涙をそしまよぬかなん也　秘　慈乃名香の糸とんはらるし
よりあはせてなくなるこゑをいとにしてわか涙をは
玉にぬかなん　秘　此哥は七条后のせのへ名時伊勢か読まし　箋
河
伊勢集に七条后崩し給時うへおつかうまて御まさむにをとり
たゝ給をもなきひとはいふまてなく　給ふてひとに何とかはさ
給ふまにそ糸はより合て今は袖をよんよりなく給ふ絲
名といひおこせられは糸をよるくよりうらてなく名を竜に糸にそ

伊勢のごともかりこそハ　秘 こゝハ御しりしつきいつたう覧し
河 一本御ハ女房とゝしつきなるへし　河 家人納言新撰髄脳云
いせのごとき中務君なとしへたる哥よし　本朝文粋云従洗弾
琴者閤巷称弁 御 俗謂貴女為御 蓋爽更人女御之義歟相公
兼弁官故称共女也　蓋家御作歟小男女　已上河海
うちの人をゆるさるまじきにみ
物とはかりにとりつゆならここの世ならるのよりけれとに　姫君有て
河 京によるをうらとハなしにはるか縁の人の心もをかしくおもひわたる
秘 姫君ものし　引哥 京にてなん物とはなりに古ことにも物がたり
なくにことなり
異 引哥 古今云物思ひしにとし家集云物とはなしにとしもなし
如此事多し　私箋 法師のつまくも京にても物とハなし
ゆきと和泉式部物語にいはくつるこれ
花 此世なるもれ見られとこし生るのこゝろ見しるもさりなかりし御て永世
の子きハいつもおもひかなきへし 是ハ姫君の念をおもひて
箋云花あるノ花なり物なし

御くまん尼しほくり仏くゆりもこし給へとて
秘 ものゝ文書事とも宮梨も薫も申し侍し姫君なる人
うちゐもて姫人の硯の傍あれくに 箋 薫の文の京とて出して
お草海にになりかかるを結ひこめて思ひにかるとも何ハかん
河 総角 日本紀 挙巻 催馬楽　催馬楽呂云 何かまきの
なりやさかりて寝ねしも海つひ何ひかかりかよりあひ
今案あひかりハ八尺なりしかりてハ京のさかりなかり
あふみさかりて寝たみのにはんかかるし　定家は哥
なかくしもむもさかのまつのかへるかのかまるなり合にや
異 名香の京と何かまきなうにむもひかるはくの尺は催
哥のんするまて結ひつひかるやなまめの仏とこしめかり
秘 薫乃我の心とかの中んしなかし催馬楽のおもふ結ひ連ね
かまり道まよさりみんとし又名女の京と角総結ひれハされ
箋 いみつの何ものもかれかやりにまりかんとしと
此角総を古事にも用なる結ひし局を進む古の哥に下向哥
とのなまへり

秘　大君の心なり

まいりてとうらみさせ給へれと

箋　これハ下にある御せうとうらみさせ給ふなり

也大君　めつらしきわたりとハ源氏の君の御すちあたりをいへる也ともいへり

秘　其れ給ふ契りをもむすふへき身にてもあらし

私　源氏の君の御ゆかりのきやうにもひとかたならぬなりそれ

不何ともおもはすといふむねありさまなし

箋　思はん人まて我か風俗のよからぬを恥かし

何をはゝかりたまふらん事になるらん給ふ

又　これ薫の心のうちをいへり

河　行末をこゝろにまかせてよりそてたのみ給はん

箋　同前をいへり　又　引哥も兼てよりくわしきを述り

引哥同しき其の糸ハ何の心ありけむ　薫のまことさき

こゝろにかけたりへといふなるこゝろなく

秘　薫の返しに北の方へといひすへてもわりなき心よりこそ

給へまつハ匂宮の君のあるをも心にまかせし

私大君の心の事に給ふ給へまゐらせて薫の心のうち

うち給はぬぬ心なれハさらにもえんのかなしひすゝみて匂宮

秘　白宮の事也

ものすそうこつけてかゝせ事に宮をかとし　此詞第一の心地たへかたし　云下し

行もれ心ありいふましき也けりと

箋　薫の詞也　是ハ匂宮の御心よハいふへきさま也　当時職事花の人の中よ

さまさしく続けて此宮の事に心とゝめむものハ好色なるハ

思はれむものゆかしくおもひそめ給ふまゝ行給はん

ますらかましきやかやうの人とやひかりてさるへきハ心の

さゆゑ思ひたまへしかしこまりに　匂宮の御心をもとめて薫の宮へ

わりなくこたへまつりすへてかくあらん

秘　匂宮のおほしたまふらんにまかせ奉る御心といへり

いかならん御事も此さまにて

かくなれなり

吴　薫の匂宮の心を見て

まことにうち給ひけるハあさき御事に章をあふき

秘　真実ハまことに心をまかせ御心といへり

りそれを見給はん　匂宮の浅からぬ心をも人ならぬさ

ゆかりある御心にまかせてなかなかそれとも見て給はぬと

句案思心とは人さくりたるかの薫乃深切をいひくて薫
の大君へ薫志をいはれして知らんためなり前約
まてのことをハまめやかに申し給ふとは仰なし
世のまさ御なかとおほしまく御しとい　大君思心世上の分
別もおほせんとおもふすへく
うくてらしく　秘　よろしく　律意にし給ふ
うらなく乃そとき御心　薫乃表裏なくなと思ひて
ぬかみにけし志ありてき世のまさ御のかあるおもたまはぬ
とまくもおもりてくらんさ御　秘　大君の御心とかはりて
中君をも自く御身のまし事をさへやりの御別の為
とも理りを便何事もかりそめなさせし
多めへさこ人しのんすてくて　思へる　姫君の心
大君思心詞うちは御ふかぬかます給ひて
大君の詞し八女の宮のし一言をもて是絶薫への返ん
ぬかし給世乃かみめし事なれまさ御まて
公界なすらハ薫なりこ是かたらくしらん

さらく何事も此世のためしもいかう
う侍るなひなきことにおもひ人へ事も思ひ給へまて也いさまかし此も
秘　うく世に用れ事なる御住居かよすらいをもひ給へ（まとし）異本
私世乃まさ御なすとおもりもく御しくいまとぬかとと薫の
宮りし御蔭さる御詞しさしわかも御為心をもそれてかのまま
何事をもおもはれ給はんなかりひかけて宮ことちらハ
秘　若おり心をもくれなるおんありちもれおもむし大君のまうすを宮
宮にすちゝハ句案へ強をもむしもきりんするなるへし
いかし（もさうつにとあハいかうハ　秘　よつきためる也とも
本意のこその次よりも宮ひ出るくさりしとし
なほ侍さためまてよくつきためかさをおもひためへは
今おもひおるかふかりきためかせらぬとおもひためし給と思ふ
宮し世をうなすくてとまるこ大君乃御うみ分の事をいつる
きる侍るてさこうし世こかりける　秘　是より中君の事なし
是ハいかりとの姫君のるをと宮にかし
うむくれかりハ心くるしかう　うちとまえてしらむくのかはりし

夫　深くそれ斎の公文たちうるかくても出し候へし
かけりしう　りても川ひゐめる心
葉室(?)心にも
言さやうにおもしれひとくも
事ハちと候やうにも宮ひめくさるのめさへし
とし候こゝ清の世さ御へ
私　年来お文人気りて縁し事ハ候はへるて候は　御
葉室殿御舞は九ま宮よて
我心得も前にあし給るめりし
私　葉室ようしちさもせるめる様よ前文は御室とし
私　古文は御来く此事かな
さし葉もちもり給り　是ハ文は是もおもしてしにもめぐみさ
御心もへとも
姫君蓮は御心とめし
おもし給さつるもしてもれ候ふまゐやして
是ハ姫君蓮の別御
心むなよのまゐやとうしらかしく出よとや
世中に心をとゞむるこゝろつぶと
何　出ひちの世のかくこ有絶
一所こそひとりむまゐるこなも絶しとうく
箋　御身はまう御とうりる世舞こいひさうせ給ふへなり
世の人も候りくいひなれ候り
箋　世のにま葉室も大悲

ちや也うつし花中にやし人もちゆふかりんやさしくいひかし
されぬ候りにとの有益し
夫れ古事とるもくさこめぐみよ
箋　それおよ人なりかしこもちひとうひ給ふまし給まそれし
私　白文し御う有ちりう中事ありしうらひ給ふ
おもかし也言さるぶとのさゆあるん
前よ是し室へ(?)
ころもよるまゐりおめでとんといつ御来をも合ていつ御し
秋　きしてよかるへ御心むな
なゝ成こゝにくやうちるかんつ
それまで中やとうし
きいのまゐひるめる女ゆるなみて
此候舞は尾乃さ御とおめでく
いつ御詞しも縁ひるめるか御清蓮なよしハ葉室の御おこ御蓮
んむき年もこるしろさるとこそ御候りにいひなれへさ事をこし
いやさはいるれ御其心御中よも何ゆまゐりしうつへさ此るのこもの御見
む　舞ハ御ゆく死さうし我心ハいて只わりはましにゐひまひるゆるへ
夫　わくまつりしうつへさハ舞ゆ心て
私わくゆかりうつへさ
御事ことハ大悲を葉室へ中文を白人もの事し

さそはるゝ人もありしひまなくへしらる　天
よのつねのよはりにはやう座て
秘　年ふる詞し　姫君の御事をさす
箋　兵部卿おもふ事のありけるをかくしてかへし
御心かなしれはまいりてよそへ人の心の色くかはる事をまねてかうし
業平のうたひはふたしされはこそうかりけるも実にいとしのふ
心こゝは古歌にめんとのみ箋し
かくてさくらのちるをしたるは事のうへにて人の身の世のありさまのよそへ
河左　よひ人まかりてあはぬ事をしたひ形見となるへき花
箋　家の人の事を心もとなくおもひつゝすくしける人のちりぬれは花をみて
せし時さへとおもひし　七条の后のうせ給ひける時伊勢か思ひ
秋の夜の人の事をは思ひもしらす人はうつろひにしものを
なくなりてとそしらはれてといひしもあり
身をはなれてくらしつるよりは　うの身にあるかことしと人にもいふ
諸事をしのひ出て
あはれにもなるへき人を　おくれて思ひさてすゝむ人もなし
世をは遁世するなり
松の風のゝ世にして
秘　古今の此時といへり

古今集御序に此時の事とりてこれらのうたをかなしく人のよはひ
ことのはのとりわき人年のうつりゆく詞し
こゝろいたつらになりゆき　古今の此歌にかなしみて
秘　あまりにおもひわひてつゐには世をいとひて
私云　あさましくもさのみいふにかなし交野をわすれて
ふなをはいかにしおもひしなりて人の
世をのかれさせたまひしとおもはれたまへるまゝ人をそ
うつりにけるものかなしみ御所にのそみにしかあはれうき
なかにいとかくさらにかなしみきるにまかせてことなる人の
しそ物かんとおもひぬる人なる人にあはれとも
松の葉をまたしてすむ山なとにしるしを
秘　とりては食し
河　仙人王老食松葉不飢壽百七十余年艾荷為衣松葉為食ミミ
沙門隠士行也　とりてはりといふなり
抄　樹下集　業平高吉か衣にかえてのつし松の葉をしのひなるしとか
金峯山縁起役行者着藤皮衣松葉為食吸花汁助保身命三

十余ケ年このかた　役行者松の葉を食とせしとかや小栗風俗
けし羅漢乃果を得る人なり
いかなる世のまことうたかはし　行とそしてはしめて人もあれ
あかれたりともなり
まつ此御人ども兎角にあひみたひぬべきこと也く
秘　弁なまつの非君からにまた外州の事也し　笑
私此義ある所是はさうかなる人々御中にてもあるへし此ゆへは外にそも
事と董へ舞の後にし年の庇あるは汁からかおそてハ至る人のわりに是年董
あらさ人へ今に御一所にて　大君乃御ん心此御は純かなと是年董
ゆかし外州かもなる所にてぬる人董乃身の御ん心とも是ハ又何
あらはゆゑけるはいふかおかし　とうさつかれてとかからわ
というは昔しさてあかし人々もなほしやいつり
彼御かさとさみつりにおもむくかて　ひ婦君乃御ん心に中良なとも
君しめさらにとおもひ常にまゐる人々まゐるあれ
中良のくしはらく董乃かみひとつさや外へいかれんかけは
此中良なとぞゆゑ　外くに御れんし

定まれ所ふかく御ととめあるハ　秘　白気し　白気ちぬる人をと前
まるも中気と見るといはれ人とされしと紙しさるなる大君之御うちとくし
われ内なる御一こくと　秘　董人紙しまとれ所を述云とのへり
何とかくそともまん御よのし事なれ也
さぞゆゑり外やいつまよすても同事かつら夫婦君とと定ふ　笑　董れ紙婦君此弁君
さまそれおかれ御なる　秘　さやうみますてし
義　中良まりんと大君れ是れとう　外しにれとも候より　え
おりひかる御し給とし
私それらにて大君れ所んゆるまるのとを妨しく八のかるとなりむ
んれたくうと　大君のりん乃かくなり
うそりさひとけるる世は　董乃かささ世ま業をめんかすも
なぴんあん　おいうみれ其ひとおそそるるとし
常の御まうすひかなる　世とれ流様め純めらんかそてはすゑ
あゆのとひめるさぬかなし
とにく見さるあなま此世のさぬうりと　何　事おし
きてくなれぬる人へさくれて董とと同しんかなるとさ子へんて　大君も風流乃かうくハ

光みさゝこしゆるさき院の宮 注 秋好中宮の御事也
秘 后の宮ハ秋好中宮をさしをきて后ハ明石中宮也薫を見奉れし
弄 明石中宮也 薫乃兄弟也 箋 あしれ中宮也
三条宮ハ親王と思ひ給ひし宮へうつりにもあらし 秘 女三乃宮也
うへとなり給ひしはさもうさりぬかたにも宮のさかりぬるかた 秘 好文ハきこし 箋
こらしおさまりて 宮ハなきことも見すさりぬかの院ハあまりしとし
世の人の心よせをまして思ひかゝりや 兄(ヒシ)顰(ソリ)なる也
弄 三道ハおめつてまつはりつくひかゝりたて 薫乃事也
秘 人の今さてもめりにもかきまゝにんとも わりなしと思ひと
うりわれんのかつきみまそうくそのあはとなり
なくれなかるとなる 秘 前よ仏乃御をりしみもゝくら人
をなしとのこまかにかたふりうかゝり
うりんたそう 秘 かりわれんし
思ひさん人さまにかへるみちハ行めの御ことしれ事也
箋 薫ハうちひし一念しそんれとりに今さらにつ道もみちん人ハ
さしまかりしかくしあるまて心のかへん行ハとかゝりく先逝

わりなき紀屋りなるをもんかなしかりて 秘 薫ハ心のうちにハ大君の面影也
うき世はかのやうにおもひまして 秘 大君の心也
箋 薫乃後にとりうかへも知りていひなれぬるを大君の浅からす
紀 ゆゝしき神のさハ猿なれは兄乃面をしるさとかて
ゆゝし紀伊神乃事かな 秘 様子也
箋 いまこそ文兄の紙中なり大君乃心也 秘 薫ハさうした宮
さうまも 幻ともうつし給ひにさ面くいうつゝめゆ宮にうしめて見たる
大君の世すへしく宮の御かゆりしにも御のかたし
ごゐもかわらるゆかうまつら行まさと 秘 薫乃君の子本也
無礼なる事をしいさゝかんてとこそ事物し物
箋 なかやまりて 薫乃かた行ら雨なりと将なる事也
うちつにつり給へり 弄 なとひたしかへるんて
秘 うちとく後ちもあかぬあゆかりなかりし宮に
薫乃心のうち にて思ひめさして
大君中君さ面とかりる也みりよんかなり
かくれとしもう紀伊の後まへとてたりし 薫乃心中も君のあな事也

わりなきにもおぼしけるも　箋 薫乃御ことかしこまりたる心遣
まもられ給ふかしこまりかんや　さりともあはれなり
薫ハおのつからも見しられぬへきなり
まりぬるものしけれ　人ハ給ふにて見ゆる御かたちし
心すゝしうて　大君乃心中し
心ちのみまさり　大君乃御し　秘 うけたまはりて
山住まけ侍りつる人をおもひて
箋 薫乃山住みなくるをまきれよの給ひて
色をそむきはてむと御心とやりなからん　秘 大君乃心ま
私 薫乃屏風をおしのけて入たまふを言なり
わかめ給ふまさ御　秘 剣しき給て
くるしみのうちにひなすことも　箋 大君をうけたまはりかたく
きしひとの心地
いひかけしもおかしき御やうにて　秘 うけたまはりあはれ給
わりなりにいひかけらりいとしつかなり
さまかくる　薫乃さりくしく人ハ大君乃御中に

せうこし同忌も今日はわかとなれいとし
袖乃色をしかもとまらしきも　箋 これもうすまさりたる御袖し
河 おく山乃まつはぬ松にまさりひとへの袖のことにいとゞ御しほたる
けるかりかいとゝしく侍　秘 祝の給ひとめてつきしもあはれ侍るし　兼
惠許地乃まみとにもおもひよるハ給ふの事にかひて心
中くつ親御に紀まへ心　今よりも宮いかとはさる遍
ゆれと前くるまゝのし　に宮つまれ　用まそかし
心かしうもみたさかくれ　秘 大君乃心なかり
私 枝姫ことに十月の月ゆかれまゆし時をまだめにもかくれし
わさ御をも薫乃ある大君乃心にかゝるやすまもなく
今まで宮しきけるとも給ふの事まて見るし
やうかれいとうかりし　名もいとハ何事も宿
われなりすりハわらきまなり　秘 日
そまへかたハいかたくるやうみ　棘いかりつきれて榛乃色
人々にしやもつひゆて給へつる　薫行にも忘乃深き
きりかなき今りやさまなりて　うけかれ大君りにつき

秘　八宮し
とおりひくこれ忘りおくさぬめふし
文れ宮にしかしさ御かすて句かりし　出家するは行かて世ひかの風車
箋 大君のかしこきよりすてうつ御前ふるし　さかてぬ人くたく宮
とまりへししと宮くつすぬ人　さかつ娘人くとく
有りみくにかれそあふらし　行ふ　出家に行すれとも
同 辺風吹断秋心緒　隴水流添夜涙行　後江相公　秘箋同
るとものいそゆるくそうとも　秘 征馬連嘶行人出　箋
同 晨雞再鳴残月没　征馬連嘶行人出　白氏文集
まひの戻りへまかり
おりえうつかさこれさりし　旅宿のきさ御し
いよすら紀さ御しておらひあれ行く人の　漂きたるみれりし行きて
秘 なきかとはすくてとなより箋の御かなり　箋の大君よりうしつけ　古御
戻りくわ行しさくるくて行てて
うらいのえらめなかうて　秘 大君の御し
むしろまれぬからさ御よふ　秘 大君のかて
同 むしろまれめらかりしの石に候

おいそかしぬるともるし行くめや
ありよりきわさいれまのやと　花 かの紀のさい早晨し
箋 彼山寺の鐘なりへし
いまうにいとくるし紀を　秘 御まてくいくわし
花 鶏くなし行きとらくまり
いとまりなりくるし宮に　大君めかし
おいそうかに鶏声をえかく行ふ御　秘 箋の御し
忘れ君うるぬくなしぬとうし　為家は　往門帰意とを望すて
娘うき秋の前あしらひく　忘れ本の戸の御ぬかりかへ給ひては
あさましうかるいかまん　大君の御て
今うき後をされなくてすて行きんまに　御屋を重ねろて
よへしなさうりいるかしつひのきを大君の宮にて
いせ志まへなりと　同 無役し有ありつしとし
世んはんくなしゆすく　箋 世ん戻りすし也なり
あふくるしや　私うえるれ御し
咲きの日られやまうにちうぬるするて　秘箋 同前也

まうこゑぬ暁相手の名残はたへ人まよふ所のかたにて河のほとりの霧
ふたへりをいろにかわん　私晨鶏再鳴残月没征馬連嘶行人出
山里のあはれしらるゝ声々にとりあつめたる朝ぼらけかな
奥　むかしは鳥の羽の色なとうきまもる事河中に明ゆく鶏もなけれは
すてゝ思くみとりの河めぐる事とまりあり
秘　薫の詞也し鐘の音もかねてきこえて
又むかし鳥の羽かきまよひ羽の色也夜深き河の鐘の声に鶏
いつくにかあんとうくたゝ深き山のさまにもたとへ
箋　名残無実と又哀しれあはれ山里のさまたとへ集ことし
後成に奇に暁は鐘の声より鳥の声もあはれ鳴の声
私秘よりもいつる義也
鳥の音もきこえぬ山と思ひしを世のうき事は尋ねきにけり
秘　大君の心の奇し
河　とふ鳥の声をきくぬあれとも姫宮の心をしらん
箋　世のうき事よりも今夜の心薫の事といへり
なかなかたへかたくて

玉ノ帖本
よもちかうのほりつるに猶名残あかぬ心ちして
姫君は人の心のうちをもしらぬ
なまめかしきまゝにいとゞかくしつゝ
まことに姫君の御さまはかくしけれはいつもゆるされ
けふの御宿はこよひかへるにもいひなれ
こよひの宿りに宿直すかたにつきそひ給ひ
人のこゝろはいかゝあらむといふにたゆみ
御心のうちにてもそのよなる事にや
中君をおとしめて
又それはみえ河へかへり
玉河のほとりの人の心にて
かく御前の御心のさまに
かくなれはかへるに
まかりなん月を見てのかた
夜世をかへて見し
見しかたのあはれや姫のさまの

箋　大君の心
さても御心のうちに
秘　薫し
箋　姉の君をとりて
中君とは中の君にて
薫　大君のさまのかく見えて

碁ハなさけ人（男君の方）にさしかへし寛文　秘 中君なんて
御をおきてせさせ給ふに　秘 姉君のつけとおさへさせ給ふ
又ハ大君にきこえてせさせ給ひつるとなり
わか君は中君のつけとおさへてせさせ給ふ　箋
とのすけ人のかたにてあるひはせさせ給ひ　秘 橋姫巻にも此事見ゆ
御かたの人々弁のおもとにて　箋 くるゝし
御ありさまこゝにてもしらう　箋 風流のめならす
河 いつはりにとりなしてやきとかくしなと
同 わけまくもやとりくひろけりやとりくさりて給へれた
まろひありとうりくかよりあひたりとうりく
催馬楽 呂ノ催馬楽 大宮 本滋 同音 八人為島 花鳥注
薫よりわたし給へれと大君の御かたへも給はぬなし
御かたへうつしてあつきなとて給ふ事　同 忌日のさま
此後の事にやはらの事いかにとして おはしなくなり
なけきゝたまひを給へ 男御さはし　箋 大君中君のさま
月比のかたなきわたらせのめの人かたのまてこうにのこりて

宰相とめきこえてをこたらく源氏をきこえし薄紙〇〇
異 源氏もくぬてまへの薄紙の心し思ふに宰相此〇〇
宰相しうとめひをも源氏にめくるしくるつり薫源氏
此後さ源氏なる人〇 但仏事とて志の深さ〇〇
志らく源氏と思ふ事れまるし
ちかきりして心にやかれ　ちかきりまてまつく女人
左此中君ハさもあるの〇とをあのりくさひまつるり
さりにやすまんとはちかきりいのまし　北と云〇
おやなよりつきなへて　薫に猿とくさして大君此〇給ひて
彼人をつゝ給ひ　在此衣も　彼人ハ大君
私 彼人ハ薫也　後みのゆりすの衣を一期此時大君
在此居つまとも見んあらまし　と清くみ給ひし
なかの月をさいんなし　同 男女婚合事忌正五九月云々
秘 八月にはおらしくなかりし　九月まては忌けれはなかりなけれ
異 八月にはやかしくなかりし　私 只九月
箋 是ハ其忌月中は能しさくら九月にわたらせんと薫の〇〇

御忌なれハ先おもひやるへし　又説嫁要まハ九月も憚る事なれ
されとも廿日ハ御忌なるへし其中九月とも憚られぬるにや
私
きハの程りにすへしと　薫の大君へ寄ありし一夜の時のこと
んおもひやりして　一夜の事にこそ思給ふへし
弄 姫君の御心なりにおもひくそ申せんとあるを薫の心おもひやり
こゝろえかりつれハ姫君の心をくたらひて思ひめくらし給ふ 異
御文まて申し給へと　秘 薫宇治にて姫君の御心を思ひ給ふ
今ハとてぬきさ給て御り給へし　秘 文書にあたる事也
除服ゆへあるへしこれらの文まてやりなるへし
きハの人めしてかの川へ寄る　弁尼よかくこしひめて
けふのえ秘え申さる人ありれハ　秘 薫と人のまいりし 箋
よの中にいふ御ひ　箋 おもひきこしさるれ給ふし
なめいまたさんと　薫とこらしさきすへきんとて
弁君さんまかへとし嫁かりけんとぬへき給へると
箋 人てこれ薫ともらかきさんとこすまていふり給ひけると

まし給へれんとて今ハおもひ出して　是ハ弁君と薫とおもして思ふ
くりとかきにさて人めかし
おの人ハうらこかりし大君中君おもひにし
すくしおもかりにもんまてやらん　秘 菖蒲かさねも見ゆるかんとそう
うち御事ハあるし申さし日 秘小書云 推古巻まんとあさんかの菖蒲 光
見給へんをつましうてもしいかりもえ見し給さ給へぬ
申しまへハ月日のけハ此人まてされハしくりていつさ給ふ
とかしそつき御ひぬとにとんまてやかんとまさ比翔紀本をも何
おとゝもかの御事とも中の書表紙まんむらハ比推古の紹と 菖
あの御方の母つまてやかんとまいりとあんへさし　今案誤し
秘 菖蒲給とある事まも人もうにし給へし 紀のあもかしいひりすへにさふ
らふ人見んなんかにくくとさ給ひね事とこかまとくへんとみれ
大君へのさらしく思て身をたしし給へふんて
せめて 根のありてハ 秘 御よく根をさらて中君とさし おもふ人へさそ
私 三条 帰ら給ふる事まかゝ嫁へいとし見ゆへし

わさもらにさりてうしろましきかんなる事を　秘　薫の心の実に思ひ出る
かれらをしらんそめてかなくかたらん　薫中君の心通はせ給
そかゝるしほるく御かたちのつくしき也なり
ふとたいくていとてうふそさる事を抑よる人のあらん
秘　姫君の中君をとらひのみ見奉薫の心はらに思くいふとは思ふ
事かれかたく人のそれとなり見てはえてうる人へ分別し
秘　薫かんの心より中君よりもとらへまうらいて給ひしかし　弄
箋　中君となりけれて薫の君をもしも今いさいへる実よりかはと
うけるく字しそこれ有りなる事は
字もしさゝとも思ふらしと給ひはそ　秘　中君かくあらさん事を
とひめへてし　私中君よりやりれ下心を知ひとも給ふ也
身をつくしていはむしたれは　一夜みすもはる身にものせ給ふ
うらうらひて　大君中君をとうしふさ給し
すりみ御おもむきも　秘　大君中宮へ中給ふ詞
箋　八宮の宮ひしさ給といひ給ふ
御心をとらりしつく給ふいうしり給ふ

姫君道成家君御跡生れ時のおこなひれさ給てひふもかし
さしいをあらく宮ひおさし出ちとるへまこみまう世とる
心事とろふんなる事有りて見んなそしとも大君れんすふひ
これへくれ御申しうしこりたとのふ
れ有おなる御座りにといひはとし
きにさのとやりれをのか
やりれ御申しとふ詞　秘　おすしやりれ御申となり
何　座り御し紀まんの上の詞又示させうひて給へし
箋　さらにぬへく給
御しさうえんそれひ御申とも下詞ますさる事へきへる道もあれ
年らあ座りれ申と申されいやり御し紀んはいる事御ひ御れ
又何御に上詞ますゝ不ますそうひく心給へしれいてうけ給事へ
御の人く見えて御座りれあらき紀座りれ申と心しらふいふ
事に付さる詞しとおもてにお申しく座りれ御申とまこ其事
ふらしへ御ゆりれされとうそうしてゝん御へさし
私仕詞おまゝ不ます給道と大君つ様の御となにすらうへり
よろしへんをけそてそらふへし

くはしくすれたまさる海を　大君ひとかゝる事をさゝやかし
いまに見えたにもやかりくて　秘　中君乃かくし　箋
一示とあるまやハ母まちてそ絵へとも　中君乃細大君ハあり
ふくてまし海をゆとよりなる古文乃宮ひまうるかにはさし　箋同
ふかくしうもあるの所乃うし絵やさゝかハ教をかひさる
箋　古文乃中君を大君やかりにとそハ見えし並へきこと
まゝくかるおもなと紀へを中君をひとむかとみゆるかし
いかなるさき御なくさめ見いうら知らは　大君をひと仰とく
ておそらくはなく今めかしもかくて見てきたるひ給へまいて
をあきいかりに中君を思ひうるにまいらするさしぬと、宮かをさ
宮にたにとかしうそ　箋　大君乃仰し中君乃宮へ恨給ふへし
なきさへ乃きうるておもかしき　大君乃細しさる細
父くれなるかをと中なるそかのひかさしみかて
うらみ給ふことともあるまいなりこと　秘　母乃業を理とし
いかなりとてなし給へき所にハ　父まへも母まへしかし
箋　父母まとかう母一人とこし

所をさへとてもせぬ世なれと　河　いかにせともかひともありとまたに
うらみハ所をさへとても世をぬ母くなり
秘　引帝御一女乃三経乃事とかくなし
箋　親乃言事ハ事ハ身乃くにかはぬ
是ハ知を言あらる事ゆへ人の子乃見まゝ思を知りて心はかと
じいまいうさうと宮に　まるかなかまうの人ハまへうる宮にはかさ
されハれハいひるけたされとも以かにいへをいかなさしとは大君乃思
人めりかつぬれともけくへ思一つたにいりきやとて心はかとし
はへく世乃のれ断と一徒まり恩ひえうる房さと見絵なを宮を
をそれ人まハ心すまさはつんと見えてんもなきとし
いりせうれ乃なうん　河　石動し
おのゝへなる何事もうくうしへまへ中々とかやを
はへ事ハいひうつひ母く絶し大きこハ中君ハ若かしをへ給ひ絵を
たくさ海ゑれもをくて　秘　大君乃かさ渡し
続ハ乃父乃常そにまいらく
秘　根衣とめるさゝとし常乃父乃御ちとさをせたまへかとし　箋　古绪乃事とし

奥
婦君の事し常の人のはくゝをさせ給ひんとて相交りなかせ
ら給へし
く治御ゐ母井の女ひなき池出なし此花のれんこなりけれ
河 世の中さうしわいひてもいつくにの男といふくさん山なすれ
さかれ
秘箋此哥をむねり
かく定せりにこれ御さにもくらはさせ給に
これわらんとうやうにかくハをいいりもなく大君の心たはそかなる
此物人おのかをりらゝにく　此物人とは年若なり
此歌の物人なきあかつきの河あへし
定せりにさめおてなとも　是を同心の相前あらハ
ふさめ池のゐ我とし又仰とゝかすくせん池かなとにさか時
やうにさてめきてと云ふる御からハ様小乃心のめの
さいへやとゆめくらぬ定にをむらめれすや
河 さいいゝと定むらめ治とゝしし
秘 さは心もかしこうるとあらへ人をときる所さするへくにゝくて
て阿さくひうめ治んむらひなりといつり　奥
私年君たに物年月を云給ふ定に出かゝけり物もけ出るにそかくかゝり

うし此もへのりふぬ御心よせとのゝ　大君の年に定の給
薫君風流なこなしぬむぬすせと年来定ひし御なよしハ
弟ふ御物中てうるさけるかなし
ある人にあかさ御なる事御心をへのまし▢なく
今ハ女りれをにかまて定ふとも云し
世をへんあそてあつまれし池所ありハ　大君の世ふおもんと
せふむなすらハ何とてたりきを出してまていとたえあたそ
されとむかしうきぬひかれまそあかる
さ様とも大君の秘所をいよの治ゐなしと思ひたるなれる
これ君のさうりさめうんを　中君
なにうゐ治を屋をも上て此ゆりに　奥 薫の思ふもひ給
ふてそなすくらまもし
おなしかて思ひなし給人　箋 中君を大君と同しふおもはせ
所々をかなかなるれうらハ　中君を同しやうに思ひなし給へ
我もんをかなるやうにひひし給きんをも人をし
なく後やうにとせ給と定しにと　秘 薫へ此趣とも申侍し

箋 之文字ハいろはのはしより千字也
いかなる事とみんとてかくいふ也
これはおそろしくも
此歌はひとみんとの事ハいとよくゆめしさらましと
大君のあはれとの御文ども見え侍れど是れにも申に葉(草)ハよろしからじ
さいへおもひあはするはしにあとへ(ろ)おとし
又それぬるは海ハいとよくこうしはしめんと
かれハ中君もとのれ(入)り合ぬらせて葉の後見えんとや
おもいまでもおりふ風うなる也
ふさ不なるらしもあはれまして
秘 父是母也おもりしていたを流うし給ふそうなる流き給ひ給ひ
母すきるものへかし二人にするを流ほとと給ひさ海也
ゑとよしあうさこ此れこきにとこそ流すとひ給ひすつかし
萬物とさひしきるまを母すすうこ此の給ひしとこりされハ君達
人中に給ふ風うふなすひさ給ひてこ此也し
秘 此是保れる思葉れ結おはさ後ま此ありそうがこ盛不當し

秘 年ノ若乃細心し
年の細し
秘 葉のうもかに宮へ参とし
無紀の文世恨源
秘 年乃細し
秘 父是 母也 箋

りしるれとかくいふのつまなしけるま
乃ちの御ことい 奴末ハ気しぬるめて此れ音ひも世 年の伴也
それさる也へさしへかんおろせ此ころうことなし奴事なるま
箋 古文の此道ゐひと 似合うし(人)おろせ侍して文紙りとつなと
の嘉なるうしに ぬるものくいさの此ハまいめるなるまと
これのさやうなる也 年うる也の事
一とこ詠とうし給ひゆくく見んおさとまりて
秘 箋 古文と此葉乃さやうにをおもうハ嫁君一人さるまとも先人也
見えんおうつ母へいうまゝかへんの御給ひひなかましかし
まれさる也達ハ乃事ゆめ(め)ま(い)ハ 此うす事そさ後ら嫁か事ハ
常にあまうしてしき行くりさ此うふへとゆうかし
東くろうゆさしへそ流くりいて海わし宇室うれ
箋 葉句是文かん事いろまさかとも嫁きれはすぬすとしくこれ
右文はおる也事し何こハ萬葉と後もりこうとさしけれど
よあうかぜ白やりもますむ也しる也れ
けりとて雲色れとやいとして

仙人雲霓爲衣 文選

雲是准王宅 なとといへり　仙人ともいふ事し
私詩に　松間寂々無烟火　可服朝来一片霞　見両詠
又云　来時玉女截春服　剪破湘山幾片雲とよめり
これらは道士仙人之さたをいへり　秘 大君の心也
いかゝあらん作りかへしにや　何
蝶外 こしうし
命主婦しはへり　大君の作る田舎ちか中君の心
いかなりきと御覧しめられと　呉 無とよしめくた
うち給ふといふにいふことをはさんと
かくなすとせんともあはし
なまめかれなる御そ　呉 同云ちかまほしかと思はれの　一説云
和ノ字の事也
うへすみてもせましり給て　義 中君の大君小まちを給ふて
ましく事をひ何ことかなれは　秘 八月の事はし
私 事りひなりきとは其まま詠ける也
まことにゆふひのやうにて　呉 姉妹同年にの給ひて おのかすてし
年は宮ひつかさをとまうつりもれ也

大君の宮へあなさまにも年のうちにはかはし
いられきいかとらしをせさせひとかなれ　秘 薫の詞也
薫乃大君の事をおもふ也　私 詞よいあしれの事也
いはく思ひ心をもひろくおほゆまに　大君の世をなんとふ仏源
さる故薫をおもひ人まて孫家とんまえて道行紀と　みてもこの君を
さらはのちしなすにも　薫乃無に宮を詞し
かしくかまつりあそに　格子の後に何ならさるか
見人とも世をひとりおはします　かすり
おなしおもはれものこされあそと　義 大君中君一所に姉妹万ふと
わかくみをいかに思ひし　別々に寝すへともかされぬと
ゐましくしかく見ゆまり知り　かりの姉妹の世をおなしは
よく知り給さんとし
うちもまた給を給ひをらは　大君の孫もいかにしておなれし
何んをもなく孫いか給へるを　秘 中君し
いふにあはれはてもひとつつまさく　大君のんし中君の事と云
私一本に此次てよむ○つ事てゆ○て云ふさる沙汰ん也

忘まゝくおとゝゆしてきこゆるよしにかくれなきものなり
三本にもよつまてとゆるにうれしなきやしとある
あらゆることにゆるつくし也とひめくなと
秘 大君は中君を大君は古今集にいへる事
小おもひゆし也し 箋
今ゆきてしまのありし給ひし
古今集の事
古今集まし給ふ世なりしゆへと思ふに哀に思ふ給ひ
箋 哀なるわさし給ひて中に給ふ心すくなかりつるに思ひ
独り給ひ給ふつるなと 大君は思ひとり歌給ふなりかなしきめ給ふ
かしこ給ひやとうらしくて 集 人々は思ふ 姫君を
ひとり様さもなくみゆやとおもひし
わさ給ひ筆に何されまとひ 中君のさ給ひ
されはひつらん給ふさみ 大君のさ給ひ
かく様もまてみれ物とい 薫君なり
これ殊とありかなひせなりて 新只と中君へ思ひ心をとり給ひし
日 大君はゆきしけれはくちおもしゆらすとし

奥 中君より一夜を明しもの也し
これ分さ給ふなりんを 宿世はれはなさ給ふ大君は通ひと
きみともいふかゝり給ふとうちて 仕様しつゝ
おとはし侍らし
中君にいひにかはり給ひもまん 人々はおとろく
分ときあるなり 集
凡女てすへてさしのなるに心して 何
秘 薫の給といへり何とてか大君とはさひかれしるにやし 老翫
箋 うるはしさ給をきこゆるくおもひくし
おさ給し地神をつきこまりくゆらんと 何 能因哥枕云人
此中さく給神といはぬことさ也といふへきのけしき薫神
の事也 皇御鏡は也まくまんと給ひし 浄土宗
薫神は古今にも給ひ 黄泉のすめらぎ也ひし女月蝿のさ
白きくつとひとすみなりの木業黒とまても古今集
は薫神といは大己貴神の葦原中国給ひし給ひし
世俗譲と婚礼人の其時をも如まへ八神の給ふ也なり

万葉第二大伴安丸娉大納言巨勢人女郎に
玉かつら実ならぬ木にはちはやふる神そつくといふならぬ木ことに
箋 人も娉せん時かゝるうたをよめるまゝは神の鏡として様々の神事也
奥 万葉哥にてもおそ縁しき神なとよめり
私 不富己矣 又云 女も娉せん人をき時かゝるうたをよめるまゝは魑
魅なとの類して事をいひかくる事あり ともかくも云
私云 万葉第二大伴ノ巳上秘同 又 玉かつら花のみ
咲て実ならすはたか恋ならめあか恋おもふを と返し
といふ返しにて 同 叢 遠し
あふ人にしもあらぬ秋の夜はゝ
あしかも思ひそてぬ昔より 何 今これ秋の夜は
あまの中も思ひなすゝねとて 中君にもあふと思ふに程なく
わかなまことこれは実ありもなくて又ほかに大君にもわすれ 遠人
かゝれいふへきかき物と 苑を何かに花かにちて 霜れ月し
人なりけるにわかぬれんちして
秘 露れへらしきやなをなて 宮之下
葉の心まかすあまり事をいくてはらうにおもしら給ふ 人御前
いれひとくつらえ人もん御こ留ん何ろひ給ふらす
秘 おもき君の事し
うれろ中君をいさめて宮にかへしと給へし
のち世をちきりてにくく給
箋 只のちなる事し 宮の御
わとちへのりうひとけぬ御心ちふ
秘 いさめ中君の心し
さかふ宮の [illegible] 出く
らひて世かし御前けと世中をとうかんかへり色し
中くも中くへかうるく御なきかねかへりかなし宮ひ
おほこなきあつまの人の心を何とかへり恋の色 いへて恨の
これはいへるとし
箋 中の大君の宮にもてなし事しかへりれ恨へまて宮の
中君にも君をよろしくたのみ給し
うちの中れさるしくもひあかのふ
秘 大君暦れ何に心にしたまひ給
何 蟋蟀在壁 月令 遠礙晴 琵琶 无限恩 悲草寒 燕未能帰
出 娘君も暦れりけれ庭風ありこれかへるも 茎ありてに人かへ
奥 暦れつにくれかくのかへらこと茎に年ともれかへらふ

箋 此詞ありし後くりかへし思へし　感させまし
若君たちへのいとくおしはかれて　中君ハ若君とも大君ハ此座なる
ゆゑしきりかりんりくもあられ　秘 兄弟ともに薫の心をかけ
ありひとへにあられぬへり　中君の事し
ひるのうに気ありて　箋 薫ハ毎君たちを逢ふく大君ハつまな
き独さくわかうらも有へし
こゝろかくさぬつうさハ打解ありなるん心地して　秘 薫ノ詞し
箋 薫ハ兄弟ハ連して別れおのつからおもむきなれむや
ありんと押はかりうさあやの心をもとめすし程として事を見るへ
弟ともなりけるへきん心地とそ　后 君ハらの身まし云々ハあそかへ
成せるけつなきこん心地こそあれ　不及引事箋引哥同
是そうく押し量る也てまつり給へりきん
后 故宮ハ御心にも姫君をおとなしとおもむく給ひすとおもふへく若宮
薫ハ御もの迷ひる事と思ひてゆるふことに又気も押し給へ
吴 押し量てハ姉君ハ中君とをも落まさて見えて身の上事ハ文ハまされ
薫ハんへ身し兄弟の一度契りしうハ文むちかくとある事を押

秘 取鳥ニ古文の御事とて兄を離るへし　但兄ハ大君也中君と
思ひておもさてもひとへにハ人のおきて打解るへし
箋 古文ハ姉君をも連れてたまふるに非をのうちの事し
それ弟りさ次の弟をなとてかうしかし
私 要義の付て兄と女君と思ふの花鳥の説にもさて兩
秘ニ取鳥の義を可然とし　又箋ハ花鳥の義につゐて他し
又案ずるに哭の義も理なり　此義なりハ指して落
薫としハ大君ぞん薫の事とさてのうち押うかへひく中君と
おもれぬめりとんとそうなりとさてのうちのうち弟と押うかへ　押とし
角くせさふるこハとに押し給ふとんと思ふなくしの心とおもふへくハ心
此次の詞ハ文なとのうへしとんと大君ハんと
薫の案ずるに白文なりとく御心のうちて恋とまうすと
いとひめみなすへし　抽あかさて中君とあまにゆへり
給へるとうらみ給ぬへし　此詞よりさてこれハ哭の義とこそ
うきくしきことさらハ何のうらにも　うきくしきことハ名たて

かうやうなる事し何ゝこにけらい兄弟なくしとしうきかし ことにて
ちはやひたるゝぬるとし姫君さらへ今ならは如比ならはあるとし
今ならは世あるもきとみれ秋まてはとつきてもあそうしやし
秘 薫より自実まて如何をれは
まなるのちつけし筆なく
姫君とも珍しけり中なりし 姫なるまてれさにんのひく
まやとうちみて給ふなり 義 暑
秘 自実ら中にも姫君へ中の給へはんかぬくそふからは取まり
まうけり給へいそれ思ひやりんとかなりめりんと所属をつ運
ましならぬ身つと恥かしくもぬかふとえ本て宮子給へ
姫君をいふぬしつか成そ 大君つ中君れのとも取中
をしおらかなるかんれ御して給へて 秘 中君をまたにとあそなと
うち何もみくれさうしら
秘 さうしあり御しきんをと去承よりてうれし 河 進心 サカシラコヽロ 日本紀
さ御つきひやすり御文書 薫京らまは姫君れうつくへ
姫君れんよ中君れうさへ後見の文とやう給ひと
秘 薫らまた姫君れうらくみわり

きいらまはうれしく 秘 中君への後見のみぬるへし
わた大君のすみしひとひのふなめり
秋の筆ふもとえうれうれれ 義 信明集云 露はおけれと
あつれる中の萩の枝はうくしそ秋とえうれうれし
私おりしつく出より薫の姉君よりのさんいそこてうて枝へは
おかしひつるひかな紀よし
おかしく枝をまさそてそあんらら山姫に何事か深きえをとそや
河 田しねとして本葉のうつふき赤しそ秋の始なるにけし
岩 おかしね枝はまき枝の色はあり見よせ給りさ紀く深からは打
姫君つりんきそれなましりゆうよし
秘 薫まて大君ふてそんとそあうさる所と大君まて知りゆうわさ国
なる所とひ枝のやくそあさしめ給へとし又の紋は白き薫
親眼なる所と連枝といつりいつれにらひらりし所らし御局
やるゆさとらし給しはかきとも南一当の義つるかし
義 これは薫の心より自にわかれ疑くうちとらうしゝ姫はらもあわれ給へ
兵 此ちと両家を生みの目面は山姫のゝらは何事か深きなるへし

こゝろとをかしきさまこそあれなり 一云 薫乃心をもとめてひかれん
き秘れ事し 薫のんをは姉君に深う御知り給へるとて 又中将
みつ思ひとこそ給へし 又一云 薫と匂宮と叔姪なる由
ねと云り 秘 ふ姉君の心をかやうにひき給ふ何事も深う思ひこと
ともやとし 先師説しきに又明白にさとりやうとも云也 しるを
浮あるうちに所為音文ころ 箋 宇治より帰り給ひ
附きさるうちに給ふ そのみまやその宮文と思ひ出 姫君
そこふかうをえてたすてやをなんとし 秘 大君れんて
かりに何となくして薫乃さしんともるふて思ひて
実かくとゆつらん 秘 後紀乃みるれハ中文れ出すふつきさまそと
きぬふる紀みく 私 大君れんし
紀太息 山姫れをもしかふ心をえてとうふへくやふう紀なるらん
至 姉君れ何は事しうれちさて薫乃中君をかけてひ給ふ
ともをまみへく 宿ふとし
秘 うけたまはる中宮きハいてうすれつに〇なすらハ 姫んなるへし
さりとはかうハ大君れんをも中君をゆつらんとてよあり

奥 哥 れんを花染ハ秘めさるねそ思ひけるかなやんとし 姫君
れんを何事ともまつ〇とも 薫乃中君に逢 神は給ひし 給は
をれそぬうちまゆをなんとし 箋
たいせつすしひみつきに給へり
をんしをつまりう 薫のんて大君をハ給は候を紀と
秘 思ひけてなをゆつり給ふなりし紀を 秘 無益し 奥 無為コトナシ
秘 大君つ〇小中君をとゆつり給ひし事に
うけ紀ぬはひく 箋 薫乃旧心なりし 哉は 無理に
うく大君れみひかゑハそえて
ゆうくめれあるし 薫乃本意ハ大君し
やまかくれんをそ秘んなんたのかう 姫君さうみ
うつくしひそめしと憾あし
世中をいひせそんのんまうつうもうるハさまにを
世をいひせそ なうつさいうのかくれいうふんをいへり
ねるしまうらうそく ここうきめらうん
に かり里にうくゐすし 小紅いくそうりねるし やや恋に思ひ つき

何事につけてもわれ人さまを思ひなひて三宮白かさし　と
はしめよりて先中君におりせよりて一ところを給ひめんと
思ひより給ひて

秘 姉君妹君なとこなたさまにいひよらんと薫の給ふそ

箋 引哥

異 引哥以下秘よ用し

兵部卿宮の御心に　薫はかく思ひ給ひしなる薫の
さうりに中君を先白文にめしつらそ　姉君の此ゆへ
大かたならぬさまとも思ひし　けしかし給ひて　弄 箋
三条宮居にわし後まて六条院にそうの給ひするまてを

秘 薫こうに依りて今三条院と称あるにし

異 白文まて内よりも曹司あり又二条院も里し又六条院の内にも
曹司ありし[illegible]

私女三宮の住の也し　三条宮居にて
六条院の曹司はたに女三宮もうけらひすへ〈薫も同宿に住〉
給ふへし白文は給さりしをわかしたかとらくておはせ
居りる[illegible]ほとかへりひかりさいつり

あけてハつ宮にまかり　白文みちて二条院より里住ませておはし
しなり六条院みともおかし紀　薫の御しのひ給ふまゝおもふは　ますとへ（さと）　異 箋
思ふついゐをもあらくれき御心なり
さりなからまめの此あまることめて諸めおもふまゝへ
風りつきて吹くるほひ君　箋 薫の匂風し
それぬさ御身にしき給ふひく　白文はおほえし
ちしとのほりもくてをも　秘 るにまての新面なすへし
異 階の中顔なとに春のゆふへにかの給のかをりてのはなのめへし
うへのはのさ宮をそ　箋 月れさ宮の京へとを賞あ
なるへし
彼まの事とも　私宇治思事し
子のれりくおも　薫の思ひさへいまさらなから思ひの
さもおもへとせんと　白文を中君にさるへめんとのんと
おもひいなる風のおもはしは　異 中宮君を白文みそ御給
まつ姫君より治定せんとなり
わたくしさ給ふまにも　宇治へおもき人を給ふをもとに

詠く薫乃白菊へ歌よみ給ふなり

なに給へりける近ハ　薫の粃思ひやりし給は絶えぬとなし

女郎花さく野大野をおもひやりておもひくやさぬと申さん

弄花 枕もかへてまほしくなんおもひあまるれしおもひける野への手枕るるの地と

女郎花ねたりける野辺へ手を廣さりちはおもひけるかすかなり給ふ名をとこ立ぬ

大野ハ名高き見来勤なるへけり

おほ野ハ名不可かくし廣き野とるふ也

大野と云名不籠紫ありし趣申にも立寄てはたゝ廣き野といふ也

大野もて只廣き野し宇治乃姫君達を薫乃御つくみの給ふ也

湖月 角りて白菊乃うつろひたるにひみ給ふし

かへるに角ある菊をみせて人のまへる御

箋 薫乃奇へにさしれ深き人のうちへてハ見あすまし給ふ

此作しハ昨もおめゆかしきのもなきさしされも菖蒲の蔵かなし

角れ菊のことく心をしめてたゝへ見る人と女郎花を見かし

只大かたれ菖乃色しとてもりとうれしく思ふ人まい此女良花を

みてしとうし白菊乃けんさし侍らぬと薫乃いひおもひし角かし

なまくやうなきと給ふこなし申給ふ

私　お給ふこなしとて人の心給ひと申せにこれあまりいひかけて

大かたれんさしおもひは匠部の中よりも起とし

私　女郎花まへきてなまくやかとりふりあるをへ古乃

河 如字シキヲ工 励さこゆるし

あれうしかめし

われうしかめし花も乞ぬ花 通胎 秘引奇同

孟 秋の野ようまりあ花思ひて女郎花

孟 秋乃野ホ乃奇れんにて

箋 引奇乃心るれんてハ乃薫乃何やうに徒の心にも絶

て宇治あたりのをとつ宮ふとのもあれし思かし白菊れ宮ふみ

されとも思たなりへしとうふ宇此奇まうれり

孟 白菊れとし花くのまふし

としたく宮へにも　秘 うみれんて

人のれあり心を

何事をとらえしつハ　箋 中君の事をといひ申んと薫乃思ひ

秘 中宮乃何かりと給へたしかいけり

うちくみまひたみかへりたり給ふ　大君れ中君へ譲んと給へ

秋 薫乃仕を姫君おもうて泣 呉
さえこえわらぬ番すましう
秋 中君とハ匂宮ぬし
ゆつりまして いつまとれゆこゝさそ
やこし薫乃仕乃御へし
泣らえ姫君乃眼ともまろまし
薫乃下心とハ知らハされし
んもえりとり斗し給ふ
薫乃思ひくかよひのすとハ匂宮知り給ひてんをさかめ
とらふんと宮ふをおし やむすひ給ふし
縁ハ乃縁られ斗御んさ御よ独ち乃めんとて 呉
秋 匂宮君ん泣ん乃うらくしきとうわり此宮ふし 義
秋 中君乃独ち乃めんハ合るし泥となり
おやうにあすりて 乃君まてれすの里おやうりて中泣みて
よし兄君ふ宮ちりん乃まと御事 匂宮の詞 義
匂宮の薫ま宮して仏のと御ならてもそ仏を乞さる中へ御進し
うれんとも日にてさるゝやと 秋 薫の御ゑ 姫君を連乃仏ふ匂宮
れんやと志實なるんとは忍ぶましきそとし
泣うりまつりにく三菊つくゝを 匂宮れ泣仏をうらそうりし思
わるこを蔭ミをうこらゝへしさそまつらしさ泣なりたち

それうちもれ中うる泣しと紫し
おりし御をなへ宮やう 宇治への御さうらうりとゆうれるにし
中よハ日れおらん乃ちてかとく 夫 時正なれハ才泥日を泣
秋 時正とも云天正ともいひて吉日し
義 彼岸時正とてすう泥日ふとるし乙女天宮流造畢此後福德
を彼岸なりゆ
思ひまく日をはるぬ 宇治君宮へ匂宮を薫の誘引し
きらハ宮なまとや申しめ 匂宮乃御母明石中宮
不審さうちゆるとを和まちれハとらくしき泣座さつ名を此中乃
秋 匂宮袖添まて乃時を和わりし給て夕霧乃都との御のまゝ
不まり中ゆううととのほまて給乃 とされてもし仏乃徳より
しるしみ薫乃都乃給ふ不は宮を座し 薫乃縁て 義
秋 宇治まて河のゆるにしみ泉川み仏へさにおうされと匂宮
とハれハゆ思ひ不ハり一座し中うらしとて川すりしるさに
独歩へさ宮ちを菊く座し給ひかちし 天
宮をとへおかつ年り給ひくおとこしぬ

匂宮なとハ中宮よりにさふらひせらく薫も宇治の事へおはしぬるとて
見とかめなさるへくなり　秘　宇治宮の事なり
その君へはうつりぬへく何事もとかくにも
匂宮と薫とつけておはしますとも人とゝめもなしかし桃花の比
人々もおもしろくおはしますとかし　薫の詞也
事いかにしはつり　花　頭字いとうむなしく
兄君ちかきにつかはしけり　箋　姫君達薫の御しわさと
むつかしくおもひける事なり
うれしくおもふことにあなかしこおもさしてしかりしか
秘　大君も中君をゆつりて心やすくしたしき給へり
中君をさしてかゝるにしかさらハ　薫の心ハ大君をのミおもひにて
心もうつろはましかはとおもひ見へハ中君ハ心よくおもふへかりけり　箋
異　うちの御君なとおもひさらにあはれにて
うつりし後をもはやうらみ　大君はわりまて薫をと
引かへしやかて中君をうつめしくおもふへし
箋　大君ハ薫ハ中君にうつり合せてやりにしもかなしかて中君へ也

なをやかてやかて御まうでをこのみ　秘　大君へ薫の御いらへ也
箋　かるれ白宮のよしを何やう屋と御消息しなくハ秋のあはれと
不審ありおもふへき事なるへし
うちとけてこそ一かたにかしこきつまこそなかれ
秘　薫の詞中君へ一説中にあさましき事にや侍るかなり
私　此義如何是ハ大君へ中君の事也
おほしられつる事にてはあるしにや　大君も薫とこそおもふ
御心ありしを悔しくをなすにや思ひやこそありハ無意趣
私　大君中君の心にかなひけるとハいふも知りなれ
思ひやこそありても屋をかへしても一説中にあさき事なり
異　無意趣し　箋
思ひやこそ薫はひくハ　是まてハ大君へ今一説中なる事也
え屋しまし説を
これ薫の詞なり
今まてつかへしてとかくしたまふ事ハうちつけなる心ならんや　匂宮
薫の大君ハさうへ思ひいれんとくへる宮の御あたりにてこそ
といはれなんとかゝるへきなし

いはるゝにもかゝつらふことにこそはあれ　秘 弁か心詞し　箋

抄 あの姫君をおもしろく弁かおもひあかし　秘 大君へ申し心なり

さなからと申を宇治にハ　秘 大君の心なり

行迄ハよろしうなりにて

箋 薫乃中君へおもひうつり給ふとて大君まんなしやまくはかふなり

彼いる事給ふへよろしはあるへねおもすれ

抄 中君のもとへおもへよろしきあるへね浮の字を行て姫君への給ふ

秘 中君のかくいへ事給ふへよろしきあるこまて大君薫に対面せよ

おもふと申さ渡つきゝう　秘 かれ詞し

いとよく申ぬへしとそ　大君乃詞し

たゝとか語ひなんと気めんしとて　中君へかく語らん

とくさるへくは何とそ一言をいふ所さなきやかと大君ハ先つ

人めていゝくおもしろさうし　箋 いふへくハて文字濁る

とも絶して薫の心すゑて中君のかくへ度ゝ御座んとの大君の心也

さうしの中に立れ袖をとらへて　何しの心さなきにや

秘 浮子のこゝろなり

抄 浮子の心なる事を行ていさゝかの御ゆるしもなく物なと宣ふまし

いとうるさきことゝもさかれ　秘 大君の心

こゝに語へくいひしらせんと　箋 人となりしかも思へんし

吳 姉君の心の薫と中君のかくへ度ゝいはせんとそし

おほ人となひまき給ふまじく　秘 中君をもうらめしう思ひ給ふ

吳 中君ともおもふ事なしと薫はゆかり給ふし

女まてわくへもつゝ御に一夜せんとかくによりて

白女まんかるおもへとして中君乃ことへゆかしひとつ　毎恩

これにまていふかりとぞひく引寄せまし　箋

白女まてかね心おもしへ乃まにゝ入りまふなり

秘 白女の御心し

さりくをなれなるかまん心まへ

吳 薫乃やうにおもひへすしくなれてへしせんほりと白女の思ひ

姫君まて知り給ふてこーらへいゝまてんと　姫君ハかやうにならぬえ

と知り給ふて薫を夜まて女へぬさ給の中君のかくへいらへ給ふ

秘 大君し白女まん御事をよ房ふも知り給ふまれし

おりしまいと御しうを　ありしれんて

うちくれんをもつけり公家ハ根をおりまへ人を
葉 白衣みすをかけて大衣へもちせかさおし或は根を鍵せんとし
またもちひ鏤ひつきハ 秋 うつりの細
これもしるつ人や 秋 弁し
いまこうしさ人ますへ母 秋 うつりれ家の所乃事し
いまにうしさいひすへの事 れめをおやは
同もおすらぬみすのんしのとる かうの細みをもいつて
秋 大衣れんにめを何や まいみをわうつし たら縫きを鏤つて
かりよみめつうるおれは 何んの乃やとは志つて
秋 大衣れ細し 私つくいれの何んの何んへすうく人を志つて御門から
角の所つおり何れつるにしそと薫をも大衣れ根をし
今いわすひなすことりつきいえをしくいみりさせてをも何みありは
秋 薫れ細し とりへうきれぬすしおとつりをもちを所公事ちそよ
なめは薫まどうわるいけをもの細りもせさ鏤ほ人をし
衣人をかたれのにおほけよりゆんるを 秋 大衣ハ白衣をやちをせ
まちすいでも白衣のれんさしい中る衣あと志つし由さし

宿世ハをんうさな純りと称りまいつて
御んさしいいうに 妾 白衣おんか中る衣とうひのふとし 葉
いとたしう一さひ鏤ふは 大衣れんと薫乃つふ細し
うろきぬ方とて初ちに示かなく 薫の一ひいかわるうつぬうす衣え
ねいうりをんはおれいよう縁 秋 ちゑすかぬよいそのれとし
秋 宿世もんうちのし北めにのるうにかうき鏤ひ鏤しれとし
しさつうしれるこめちつういとこつ純を
葉 くりきをうそうやうに厚さてあうさとはさふみのしなきとし
あるの衣いりれひのうへう色人を衣何んうりも 妾 白衣れ何ん事し 秋
葉 白衣かね薫をもちうつまおかうしめうるをいつて
うるる尾を人めつらくつをいつて 秋 もうし中うの一かし
こうらへんと一さひし何をあく
妾 しさ寓ふ有ってせとけつて乃うまんへ人をなり 秋 大衣かね細し 宿世
なもうく寓ふ事ハ何とももつくふんかいなくいらくとし
秋 信濃 れも純とぬけつぬ深の他くこうしてたらい
葉 只そのまへ冊 燕子ぬかくり
川 許 田 兵 ゝ 承 正七八九 勤 行 源淑

昔物語なとにもさやうにおとこめ紀て　葉　庭去め紀てわんとし
秘　あやしく侘りたる居りふと云し
うり出しかまゝつゝわれ乃とも　いかれ思ひなるとかい
葉　薫乃くれまくふとともめくミ給ふと日家れいかやうに思し
ありけんとの薫れ朝し
わりくれとも何川めまとりし給ふそ
薫乃心種の心まつてとことしくうこわすして思へまと
えりとう川しかもなし思といひのわんとの事もし
さりぬことりまと　秘　りわるれんて
わかりしう給りるぬくおわりして　比和薫の中将し
わか宮御わまあるふ事わかるひなすわれいまそ
やりにゆひく宮ふかまかれいとそ今まてうくふかしくて
葉　わかまりたる乃わぬしゐゐふ事とゝつて
薫とろわるれ宮ふて
ゆめく心寄て　宮とこれなるときこれゐのかいよとし
山鳥乃心わして　尾と尾ら川思ひんへの

同　人丸奇
足引山鳥乃尾のしたり尾乃なかゝし夜をひとりかもねん
奥　雲れゐる遠山鳥乃くらしにもわれをゆきしきかとひつまとねり
日　わたゝは遠山鳥乃あと何り侍ありけれてと省河しつかれ
葉　なかゝし夜とつゝりもゆゝゆれ心とまり
ほい乃明乃雲ともひけり　秘　ごまゝ何つめうら鶴わゝけりるをと
よあ鳥附のんしさて乳ゐのといいつり山鳥ハ出とをりぬ通　奥　葉
いさらなすて出のふ尾々さ宮ゑをとかたすれて
秘　くわわるれ姫君ふ也ゑゆくし白妙出うさにおとる紀あすそし
白妙の滝の海し薫のこい涼りけりとし
白妙れ事兼薫のこえつそり侍ふて
志ゐる人をし思ひやうくりて遠ふ尾家ふるゆゐ明れ乃こら
む　同れ乃道ゆそ思ひまゝをひめか出ふんの中ゝぬまにく
今案　比家いうり山姫君及中し給へ思寄し
秘　薫乃奇し人出そゐる人とせし身はふくりてまくと人思ひのひとし
明れ乃居も海とへ思ひうとはいへり
うくみらて依んをさひ居もし人居りわりぬ居もまとつ思　ほ

注 姫君の返事し人〻座りまでぬハ御かへりこそとかんして今の時よ
人座りまでぬ程なるをいかゞといふ事なり
秘 大宮御方に中宮の事をも思ひ入給ふ御歎きの深さもかぎりなくあり
はかなうひとつ御かたらひ給ふほどもさしさぞありし心地も侍らぬ
抄 姉君の方に中宮の事をも思ひ入給ふ御歎きをあはれにかたりあり
かゝるは中宮のこと又大宮などなやましげにおはせし程
ぬ御かたはらに薫の様もおはしまさぬハ心やすくなれども思ひ
かれへいかにおもほしめすにも人のなやましげにおはしまさぬ 秘 白き薄物 箋 異
むこれよりハ白き薄物のかたし
いかにもやしけり人めもなかりけれど
不審に思ふなるべし白き薄物のことをそれとしもかゝぬなるべし 薫も大宮の御かたにおはしつゝ
あしさ御なる御様なりけんかりや 薫の心とおぼし
ろおはしませば人〻さはいとゞあはれなり 白の御衣に
秘 中宮よ御心にもさ御覧じよかめる
便なや 御あつかひ
夜もすがらあかしつゝ 又宮の新しき紙に書きなされて
秘 何か御方の御かへり 箋 同

らうにゐ車をやりて
秘 六条院の廊に
おぼし寄りてうれしきにつけても 箋 宿の霊まで人もすぐ網代車
これもかたはらに 箋 かゝりけるやは白き薄物
おほかたへのひまになくて
秘 薫 白き薄物のはらからのひまの事を
たゞ人々たゞこの御かたにさぶらひ 箋 かゝりけるかな
秘 宮の御独寝まてわりなくおぼしたれど
異 薫の白き薄物をそのなりて宮ハ姉君とも契りおきたるを思ひあはせて
御かさねしてそれと白き薄物を見しにつけても 箋 白き薄物の宿も人の心もさはやかに
宮ハ流しかと御文をえ給ひて
山里にてさかれし 姫君をも
さ御かたの薫の御かたへたてまつりて御文をも
中宮の御ことに大宮の薫にも心を合せて御方へ思ふとて
あるかにしさ御方へもまゐらせ 大宮の御心は
ぬよしなどもいひなかりしていとゞ便なし
にけいか進へまゐりつゝ姉の人〻思ひもかけぬはべり
むかしの御あるさま姫君の事し姉君と

中將も

あらきわつき給へるも　は
白氏
よの清は思ひやらん霧ふかき夜の左ゝいふなるてさらぬと
秘
そのけしきなりかうしいかなりさるをゆるさとかかて
箋
うちゝかうちゝかきけはあさ寄し
大臣のつかさてあるは　　　秘　大臣ならさら給へりなから
事は御りにて御みそあらしを今は氏まことて其を藤なは
う謹めくらはんなひなりことし　　箋
まれさりしたのもんを　　　　さらはた大臣おほやけて同院
ちかひし事し
きあてうせまり給ふ　　　　中將へもしてうせなかて
おもと三あるそなりきとかさなりよろこんをさるにて
に中宮わたる藤なり
秘
御彼の禄しなかの袖てあそう給ふうしろへよりてお
あすてらして中信まそ藤し
呉
同あそ人々をいかにしかる解きや一首裏表そへて中へ入
給ひまませてともかれへりうんおくりをせ給ふ　　ららと云

也
紫とはつゆけし
箋
是は君ひかるの御あるあまり御出ふるなしかはいかりけて由
せらく給へるし給ませは袞つらみれの今の紙をれしも紙せられ
う人ゐらは　　　　　　　　箋　蓋袞上しあらん
らんれさりしかりしおもへ光　　　至　らゝ筆跡は弁宮れ赤ま給とめる
秘
録鏡の給ひる事し白袞帋宮れ事とお光たし
ちの秋をうれを思ふ　　　　　　　　　秘　あるに蓋かる衣なり
箋
蓋さ白衣の官流へさるとひとかつこ
らき御しうりにせとまりてなにとあてあゆを
蓋をゆゑひのおへりろをとうりかへとなり
私ら私う此世の事にも御ぬさ由なるとうかなり
いかゝせんかいかくさりしやとて　　　秘　官信方しらくれはあつるる
らわて花り給ひぬすやとてうしをおうれかし
ら御らかなる御中宮　　　箋　官信の中左いこれし
嫁しきよさ方はきそうへは中紀　秘　こまひは娘ひまさやて
さりしらはこれ中をあしぬさ由すて　中將と大臣の御諸は給し

こ紀御息の神乃いと少さうぬやまいは　業平も多くいへり是に就て
さうしへとうらみて　秘　大君の事
世中にもらぬもの　秘　婦君の詞
あらしうをあらぬひとさりと云て　大君の心一同
かりて乃さやうきはうつゝへとおもひなきやうともうしかと
秘是ハ薫へ中君をやとさの白雲のは中く思ひかぬ
まう君しなりさまなんまちうらうし給とも
中君の心のまうしあらかし人時大君乃にくぬさ給とひあ
あくしうの君いかとそつきめて給は
むへ給ともかくにぬよりさはそのうちそ紀の人と
秘わのなれはおやの人なれはつゝもそうれといへり
箋中君のゝま婦君をとうしく給ふつきま事とうとといへり
いらへをもおもらぬ　箋　中君のさ給し
われいもかの　おきさて　と　中君の心大君の御
それとはあさし　御　紀綱し給ふなり
人まへまうしはのそひて　白雲のかまひのまふすふ

いよくんを大君の給へし給らんと人まへかといふ白雲中君嫁女
と中君のうらみし
さはんをとなく何うれのかひし
といへり中君のおもふ白雲の心しめて　秘　白雲の心ま心あ給つる
よの給はかりなまりひのへ思ひ給ひしを給さるを　持君の女の君の　給へし
中君の心さ給へ思ひ給ひ給へる　中君の白雲の給ひし
われともいかゝとも　秘　中君を何とも思ひ給れ
いひあらし給へ給の姫君を　二男の事し
家り何のあさてこなはへそらすかれ　秘　は宇治乃皇女と
あやしうかなるひさらん　中君乃心中し
さるをは思しなそ　秘　中君し
三日の夜さてまちかなん　箋　夢の中さへかりし事し
おもまへまてきけせます　秘　大君中の前し
このきんまやのかんに　秘　前まはさるは中君し包そと云て
中君とおあさうさにそこのきんまやくひなく大君をおあさうと
きや給人まんらうらもまうつけなりけれに　とまふの方に

おもひハさり除くまかて

何　雑役し

私之日の夜まて雑下の人々雑役といへり

とのゐなとしける時に　篝　一夜の事をうしろめたき

おさ留むきなるをいへり　これの御事のことゝ云　櫃紙

みちのくにに

川合と周るの事ハ中古しるとのいふしく

あひつきうるのまて　む　みえうへもしくはするをとりて

秘　ちりしりとも其さ始なり

夫　むとしく井のかりみなの

みそのりあまうちうこに入く

夫　わするうけこれ

家まんけるにさふひなるふたうひく

篝　母女之家へいうゆるゝし縫ふさ御れ　夫篝

うらに不まの要なり

へ御なるさね何やなまや　　㯃を縫りもせぬし

御妻りや相り　きニくてり　篝　大君中君の妻うりと

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〔頭注〕害　御衣櫃紙らし　　秘　女之家ある御

ニくくりとまるまハ　姉妹のなふとあかれしうちと

小夜衣さそてるしなかといふれとも　かよひのハうまれしとあし

ひさとにそいはうれんし中君宮のまそるうりし　かとも

そのハひかりしりといつるなり

むなうハ中君のしとまりそれとも是ハ大君のまとえれまて

あはりひのすとをいつるを篝姉君し　姉君のまとえれ縫ふ

えらはうちてなとし大君を中君と実のハなりうれ

らもさらひすしといつきもちうのまとハいうゆらく

おほしきあし縫へり　いひおと須落ふすれんのひ成のへ

これのゆれのゆし河あら　秘　君申りし実の　く縫

御つひうらへをかけてれふなり　夫　しまの冷ふと河る今れに

さかりうすて何るへきまとはひつりれはや丈夫のんつひ君う

篝を倍しのんはりひく実の御も後給めきらあけのきれうく

御夫へ川実れなすとまるつさんつひぬへし　ゑや

夜又君

庵らそなれんちうハかまとるもうまし紬とらゑしと秘君よ

秋　んりハ紬かくるもうれし紬といひうつりとし御ハ見へぬ姉きと

人あらしくさうそれゆへ哉　わすれ侍りにさふらふと
いひ遣わすといへり言の葉の辞し方にいふ成る哉時を人にゆづりて
まうさん侍へまうして何か書かせ　秋　薫し　笑
うけ給はり見えまもあふられまうすへあまりにそれし
まてまつれ夜月の気色り侍りて　秋　二月の夜なりし　笑
私白妙茶碗のなれのわりなし
御心をもてなく　白妙は御心中へ
中宮なるはかく乱れおもひし御事にて　私白妙と申の中宮なる　例し　笑
なにとて世をのこれやすらう世にて御心を
秋　一切の事と思ひ始めし不そう是てまうさぬあらじさらに世御詞まて
始むへしかく宮うらに始め必こらんし候し
薫　これそあまりこれ白妙へ始と集へせんとあれと申しこれ
ましくて御心しく此紀事し
始文は此事とみのかんとてそのことかうて苦人の運言し
う人をとうし始めることに　秋　言し
いやしくみしやおかりして　秋　白妙し

御なみだにこまれのまつ哉　白妙は泣へ文をもり尽り侍るへし
さるまじき内よりと御陪をそへし　薫　薫ぞ泣泣れんするせ人へ
給へるまゝのあらうて　白妙はんて
いらせ給へなとうらむかうりぬ我あはれと　白妙は初め泣へ出ん
事とうちかへさうつひまて　秋　うけたまはれは何しか白妙は悲し
よくわ宮しきびをしまん
右御心のあとを悲しんとてなすり
むかし人をそいて気の毒り侍へ哉と　薫の詞し
秋　日来とて気の毒さてと　白妙は何もかし気の毒まてはなきと
よきかねてはにや笑しやすしさや侍らん
明石中宮は御心と薫の中折て
まいらん不例にてうしはへ是は　明石中宮白宮と申す我例のす
秋　女房達はさつて不敬と気色けして　秋　ひすかとくまて不忠ははずとど
始りし紀文つくし出すしに
私は文つへ出しや極秘をまつりし人也前よ薫の出る哉
左り剣　明石中宮をはし御紀南河んとし

うれしきあひ侍りつる事　蕙君鬼をめでし
私建して来而しめをて
いとましく　白女君親ハ　中女の御りおもしく
宮人ともさや事御ともなく人（おもひ）しりなむかまへしめて
兩去紀月の御とこそ　御所の御かしこまりべきのおもひのまで
いかならうにも侍りて　蕙のみ
なりの御さつれの事とそ　蕙 さいられなにてさらくんて申
流されれとも京と宮治との事し　三日の夜なる事ともいは須い
宮治みや心ひ歎き給ふらし　宮治へおかし申しハ中女の侍
給ふへき事をおかし　御さたられたらふし
こよひのつねにまちつるまゝれし　させく
ともり前の親の中女の後見まて思ふしめしやに中侍ひ　しハ
白女の御心よりさるの蕙の心てさて白女の心実葉し　見ひ
人の不む中れハ今ハ又白女へむつくと付て宮治へ此侍中さん今ぞ
ハなくこの山するハいて御へなき　秋 宮治の君なれハてきとはんあき
河左 山城のこりこの里にまるハあまとむと思ひ川ゆくらりおもゆく

上 蕙君おもしろくハ思つるより出させまへてと申しおかさらし
裁るまてハまき給りんハいて侍人ぞとも申し給ひてまゐるとも不□
聞くれわしなまと申るし出ほ人よりハ不と参にハいてもうかり通れ
なりひ親男まいり
いかにおのさまてやさる事ともあまらんと
給へらさ御事とも申させ給し　秋 彼にへおもハつるるによりたるへき　秋 武とハいつおもりてみち
御ともにそおそ侍りけるへし　秋 蕙之親ら
思ひのもさうるひまつ　春 うけたまハりぬ
御白女の残り　蕙 きこそれまし御ふおもひとゆるる
うへきこしめして　主上 今上て
いさ見たまてぬる　いさあやしのかたの文字悩く　白女まゐり
中女のいさあ給りぬまいるやうひのまゝのまゝ又御うちみの字を清ほし
めかのゆると勾と切ようるひの花を結ひて酒を渡して松風つるまゝれ
わすてさるかれハ細と紅ひ　秋 御心中女のいきてまゐらく
おもし泊まさし　わし今の中女の御つらて河まゝにおかしみおもひけり
大女ハいつまし　春 何し れの中女てし

廿一段とうりやしおもしろしまかれへなめる　秋　廿一段の御わたりを
くはしくひきなどして　薫のんで御母中宮に申しひきたまへめる
まゐらする人ども申しのまへにもつかりけんと
うやうにちかやかなる物かたり聞きこえてのなかにも　たゞ
御かへしにてまゐらせしもの中にしるきをおもしろくしてし
それなるにならけりごさみあめなかりけり　薫の給はく
なりさる人宰相の君へもかいなくてとかゝりて
おほせけるにつけても人をまて　中宮の御さきの女房の申す
薫すめるとけるとまるもみえしけれとみえておしらせてまいらす中宮
の御方まさかへの女房にまゐりて薫の君にまかせてみえておいてもまゐるとて
まてゐし人々なりにけるれと　中宮の御こゝろのへたるとて
たゞやうらうにもて下むかへのまゐりのもつきぬるも申しのべいて中宮ゆかしと
まかれ大たこゝち給ひめておいてまゐるときこしなれとものにたまの
おもさるゝもみえさせたまひし
心くなるとゆめゆりゝれい　大集経文に可令一切衆生心同覺い
みえしゝのかとしてまゐり世申の人へのほかなしゝかゝるへきさし

出でつるなかにまさに侍ときひはうりまかりぬ　もりなれつゝかなかりの
まゐせとみちひとして
うしこにて　　宰相の君宮なり
中納言の君のあまたしきに　　たゝ東を難儀すやと申しひまゐら
雑とるとまかひしつゝさ
御文の君お作とされいまて　　白まさ文のみそなはしてかいまゐらせしやて
宰相の君におもしろくて出でつかへまゐりとしさて給はりおほしとゝめて
わらはしかのえの君のひめ　　侍もさいうしかへんまへ一しかはら
まつこひまゐらせてまゐらせし　覧い大君さそかおもひ人て　れんて
さうしみをいはてかゝらかなむひきて　　　　　某　中宮へし
いとしうおもしろくにさうりかへして　　中宮へし
ゆかしうの紀人を思ひくうんまいる　　白まさ文の御間かも給へてまいらす　筆
さうあるさるゝの君にて　　秋　秀衡ひまへの女房を遣し
あさやかれなる紀のこゝにくゝ出さうしてぬをかしぬいつゝ
秋　こさゝぬともなまま
某　さるの文をしとりふなり

箋 筆いかゞして筆のわらと筆くりかさねてまかりてぬき海を大
君君おやかんなり
つきゆかされしゆるをしなましと　箋 大君のんは筆いなくしてさらまほし
ぬともふさ人あうしと云事を御覧ゆるされぬあゆもうしとはまし
見れと屋かしさうりうちぬつ　箋 大君成らうれ観念し惣別よ
薫ゆるまも年ぬるもうつし有りもうらん御すくてもうつしぬまし
比八とも母まれおしとやいもうつ　大君のんくぬくひかし
為もしくりとまうもしこと云ふそ君のなかし
箋 比さうつ梅人く為もしかぞえくも大君君心ゆりはなんかく池うつ
されは大君とも人君さなろんとおすかん御なるし
うし後ていなくゆくかふ記らひうくそもひさうけつく
私云つゆかれに記すくもうく後へえれうし後てい今々所よ
記う為うるもと成 神乃ぬて経成
河 仲文集に中君の内侍見しけ宮有有と尾すりぬつうかれに
ゆ海へ後くさてとまつ為世へとそむくうし後てもそ絵 記
河 見むさぬかうし後てしうまも猿楽にむんへん君のかりとに奉人

同じ鼻をなくしてあかりも為　河 土し ひめうつ親し
又川し守うるん人まありゆくむとは　大君の御中し
うつるれすると云ふれ
又まてうつかり仕為所に母れなとを　今夜まておうつし よし
うしかりつまうて
大君の中の後ひしき海なまゆて　御うの中君の宮ひ参所
のれ事なまとうう後ぞて
云ひなまうさとゝ之あつんを　白文の中君まゆて知らせ後え
ゆかすのをおかくらへり　又後なとしそゆての事し
有とまてうるん 句ッ切ル　今夜有とは夜中のしうる事を推
当くにかういえまとひあきらし　平生うぬうにれれまうくうしゆとし
ちうりいてうつさんと　京へまつし見さんとて
為し海まちへうおかけ為りんは　秋 中君のんとらくぬし海まち
天河年に宮へ為は句れ為しとさゆひゆまて宮ふさとむ之へ云
さ海くそのなしけしくてかすん　中君のんて
紫つむ母れとひらふゆうさあらその言う波

同 世の中をなにゝたとへん飛鳥川あすにこ沈け舟のあとの白浪 ゆふへこ

箋 同辞同秋哥不引之 明石中宮腹の一品乃宮なるへし

いはさきもへゆへん姫宮を

廿一 宮なるへし 私これ一品乃宮なり

なかひありの宮のさはの浦のはやうつら紀そうし

秘 右後なるの君ひめたまふもやとし

私 白の作ありさ浦の君ひめにし也見えたし

中くなれんら湊 箋 中君をかへさ浦とこ所やに見ん

まゆしこさんまてかなさるとしゐたし

みのあとうるひなりしかつら湊 宇治河のあかまし記し

うち橋のいさ御ふりて 帝王系図云孝徳天皇二年に

道登法師始造宇治橋 今案道照和尚同人也

手かゝやおもひ宇治の橋かなれともしもなとは君ふかき理の事は

宇治橋石上銘曰 私勘載之

況々横流 其疾如箭 倏々征人 停騎成帝 欲超重源

人馬亡命 従古至今 莫知杭葦 世有釈子 名曰道登

出自山尻 恵満之家 大化元季 丙午之歳 搆立此橋

済度人畜 即因微善 爰發大願 法界衆生 普同此願

夢裡空中 導其昔縁

身それからいとふ河しまし記君乃よそうを

ねかひけ宇治まん河身せましくふあいつまゝすの形本紀家

此宮のありけまてゝとく

にくこの浦さ浦 箋 白君し

うれいおふすこあやまて

よねにおひ宮のしらい 中君のんよおふ事し

御身すのかは浦ゝまいう 秘 薫し 箋

う浦ゝまし かへんとおもまし かさやりにならぬとし 秘 白宮のあとし 箋

さるし経まんいかなれそうんゆと 浦まし くおひんもらい 箋 白ぬ姫宮風流ゆかて恥

てらくへわんえいるまんとおもふ中君の心し

京にありし御さんあとそうしゆかなりうんあとまて

箋 白晝かすしぬ庭りにとし

白こや 中や経ん地かなかくに橋姫の心うしく袖や夜すにぬらさん

んよりも我の疎きといつはるべし

忠 まことらまこと治まりし世の中猶ていくさもかよふれ年を経たり

日 さむしゆゑ衰へて死こそひとや治んと治の徳も

葉 なをあまた衰へて死によるひとやといふ疎りのあると

いつはるとられしは白妙をはらしかりけりもあれし

経世の為すらのとにやと治徳乃たらしめ世中をまもるならへ

内事忠

秋 一二ノ句みりし疎し

葉 中将のられんな死ぬる白妙のたよりなふりそも疎し

とまりたりし疎き哥し

物なかりし死御家らひ

何それは哥ほさ[illegible]

され忠御ん乃れ

葉 白妙は中君なんいのちにしらしと思はるとさらにもいはぬ

とある事うれし

亭さそりの何やめも

なひなし代今つきは

葉 中将のさ毎し

白妙の[illegible]申し

秋 葉の花し

葉

秋 此のなとは疎くつまし

葉 白妙を白妙のなれし

立となりる海なりし

葉 白妙の深きよの思のあらぬも

御文わく哥日あとに

秋 毎月し

毎日のすりし自くとし

わまつくり

一日小一つひまくいあるにとし

ん法つに見やせ思ふし ぬと

大君の思ふ経て花ぬるれ

哀れならつり死世とたりてしも中君をとめてもまく遠せてうね

いやこれ君乃思ふし治き

葉 大君のさゆうになた絶のまりく中

君いよと思ひし経へられいさしぬやれして御もつて

えつうにおもふ後をも思ひくるへしやて

大君の御[illegible]ゆよみく

哥車おうりて思ひくるつ哥千やに祢世つさらあわ心と思ふれ経へ

中納言の君をもまとをとをふた

葉 蓮乃んる白妙をと絶くと

治よおりたりんとや思ひ居りてくさて白妙を神とふるし経くし

いとらうかり月のいつきる

白妙思ひ[illegible]文深き御みな後ふとし

あり村しつりて気つ経つつ

秋 蓮乃村気かりしたりて気り

角ほまふなり

まろの山里いらせんと

石の上ふるの山里いらせん古き人里

人々洩らして　　又寛和天皇御哥合

叟　ミ川時雨古今の山里にいさらん住人さへ恥や袖ぬらしけらん
　　初時雨の哥一ツあるのみ　古今にも山里は大和言葉にて時雨めきて
　　とありてまた初時雨の古今の山里乃哥と定治乃里人をいさなひ
　　しめたる乃候りさ遍らしかしとまうしける　翁
秋　引哥能時ハ定治を廻ひてあるは中々に[illegible]さし
　　初時雨ふるの山さと[illegible]　翁　白
　　ミ川御車まゐて　　翁　白菫同車し
秋　九月の十日に蔵人の月のけしき　翁
　　秋の夜の宴の[illegible]
　　うらみあらぬを[illegible]　翁　車のうちの従[illegible]
　　出ぬるもいかんまらひと　翁　さうゆへ婦女[illegible]
　　ある人あまたまゐらせし　翁　白菫の人のいはぬは[illegible]
　　行しらへ[illegible]ひさの人あまた　秋　うれし　翁
　　宮人の人[illegible]八挑[illegible]せさりけり　秋　大君の御こゝろの[illegible]
　　なすあへたまれなるまゐらし
　　まゐりてのちなひなし　　是も大君のみこゝろなり

なをとりにつけてハいとゝめてまかりつる　菫花別るゝ礼とらし
　　ゆかしき御し哥をうけたまはれんと
さ
しませたまはるしうしみ　秋　うけたまはり人来りけり
まゐさかりしとゆかしまきさあへある　翁　菫とおほき御ゆるし
　　秘ことに又ましうしとみとめて思ひまするにことにつけて文字をなし
　　え候まするの菫　秘すへきこれ
うらみの[illegible]さ[illegible]いとおかしくて　秋　大君のみこと
　　あらまほしきて候ふは　　おのやとひつらなしく
　　当りつまきゆへてき他はてそ言し　　翁　引哥し
人々御うへまても他とてらしう　　中君人白の子として中君[illegible]
　　みや毎とし度りしまつまなとハ大君も思ひあまさるも中君の[illegible]
　　まて其御れうへといかしうる御事思ひたれまし得て
わつれと思婦人思御心を　　秘かにてわかまきなす人をさ事も
　　まて婦の中にさくハ情さふしにあれはなまとし　女の人のいの御[illegible]
　　えんおとうき思ひのぬかりて　菫と兵世上に[illegible]されまてつしこと[illegible]
　　まてらせ行寺よりの人に行ひし

宮の御事なと申し思ひやらし給へて
箋　姉君の薫に申し給ふ　私之按其は白姉君は
白宮の御事なと薫へ大君の思ひ出て
と大君の思ひ出されし此義不審兄は中君へうつしなす御事を
薫の大君へ思ひ出されし以下は後に給ふへし
ほのぼのされはなと哀れしくなむ
哭　さればこそ大君の形見し給ふて　秘　私此義不審
秘　白宮の姉君の御ゆかりとて今はほのかに見えつてて
薫の心の内白宮の御姉の御事なとて見えまほしき兄は中君のゆかり
ことなる事し　私白宮より中君への推称と薫の大君へ思ひ
給へは薫の心は思ひしかとも今めかしく中君を大君の御ゆかりと思ひ
箋　義者薫の心に叶ひてしかれとも大君の心を思ふ
哭　しめし御心は中なる御見ありかたくやうなり
思ひなる宮の御白の中君とおもふよし思ひたてかとや
さしもなきにて大君のゆかりとうれしき事に
薫の心をうち哭て宮より白の中君と思ふ推称
給ひ事ておもしろく思ひ給ひて

心にいつかうかたらひて　大君の薫へおくらしいおひとらふし
おほけなき御事にこそは　薫の心大君の形見とやうなく思へしやと
いはんかたなく思ひ出て給ふ　箋　薫の心
なこりしやうにかくこそあらんや　秘　昔の人に道をまつはさとし
箋　一　たえてひめ君あへる事はなかりし時の事なと
さしもなき御おもひけなむつらき故なれは
何　夢のあはれなりしははかなき人は御ゆかりとおもひは夢もつらき事
この詞を始めにおもひそめしよりなりし　此詞宇治十帖中一の詞也と
引哥　不審にはなからなし　箋
夢かとそ見えはるの哥也なにて此哥始て感なり
うつつとも夢ともなくて思ひ出て
いかにみなしてむ給ひさまんとみえんはさりける
おもひいてにもしと思ひしもそれもさりけれと
くはれんのなかめしかれて心のうちて思ふへき
薫君詞
箋　まいりまうてて明ぬ　おまへ山のもとにて

同 雲井のよそにまさる心ちもあはれなるこころにもひつかけて
秘 前にあまる風をまてとかりその時をさりしこしに袖を
ぬらしてしのびとせしことをしもひきさらすの言ひなさ
もなかれはいの頃の深き袖しくらかきてさしあたりていつ高く
色しけ哉まてありし給ふさし
夏君まうし後の御かうしんとも
白宮を初め給ひさりけるめし
女君をあはれし せしをまふ
ものをのまかくしうきしみり
女ごいはるゝんくてもて
わたくしも御かけとあはりまさられし心ひきて
六条院は左ハおもはしのそこにまつ給ひて
秘 左のおほいとのえ夕すなり
正 親行本ニハ左の大殿とあり此時夕霧は左大臣にあらず今(?)は
左まかりてよむへし
六条君の御事を 夕霧のむすめ六の君にかけおきしめる事に

秘 薫のくるしき御行はにも
奥 秘 中君へ
白宮 白宮ひあまたなかりせは宮の御の所
白宮にはたれとも御行の御所はてぬ宮家にや

さひをまてされは六条院の中君をむかへ事はいまためし
おほしなくていつしよりは給はんと 中君もかれ給ふかしれ
はれあるをとかいつり
秘 なくてにあそれん御心さりてさへつくまつらひにて
大かたに思はるゝむすめハ中君の御ところにおはすとその袖をたまへ
いかにもおもひし 秘 此事つくえに白宮のまうでなくしめいまへにありし
世の中のうつりみかやこなたさへあはりしとおもへる
む 白宮を御後まつりみかけしんと思ひ給事にさりて何にも中君を
白宮のこころさへんと白宮の御おもりしうる事にし
東宮は後まつき給ひてし此白宮を東宮にも思ひまさりその時の御
息所となりぬの給ふ一への心ありし今も明るは中宮の御後まつき給
て後は宮を東宮のりをとも御所 と此今のうりし
中納言ハ二条宮の御所にいて 奥 回想の後薫の新造あるし
さらむ人さへ給ひのくうしてんと 薫の大君を須ちんその
わりなのしそのを
うてにいまひなきやと 白宮を中君をしかすり

なくなりぬるにて　薫の心中に内に中宮へとやまさんとし
くりかへしひけりけりと　夢殿といへりし也薫にも思ひけれとし
いとゝうらそむきて　この住まゐ屋の身まかりにし
思さんとやめてけれからは源氏はんとも薫のおもひぬし
夜のうちなきとあるらんしう　薫　冬の夕たもし　十月朔日
秋　十月になりにしかりよりのうち　綴ぬとし　同　御帳ノ帷ノ　壁代
御下にのこひらくし給なりと
まうりをらんへかまり侍りしに　薫　二条殿へ大君と給さんとの用意し
十月[カミナツキ]にいつらうしそ　十月七日ともりに　いかおかまくへし
御染御うんまへり　並後撰　宇治山ちんまみちをとかんとは長月やん
るまきり日のもえしれそやうへ下つ　薫　中宮へおとつまおりん思めかし
思ひてと白かせと　秋　花の朝かいとのとあり少勇
右のお用いとの　宰相中将
の息居へおかすてまし人へなすり
うしこにきみなりうらり　秋　御中居ようにきなめ宇治宮とさまりてへ也
さ花の実をし花見の　薫　椎ノ本ニ　みえし事し

この因や小中く給へり　薫より宇治へ為ま宮にひつりつにし
まくらのへうく染まとつくろうけ　とるしけとにあけし給ひらぬ
何きゆし事るおくらねも　薫　何事も親賜の君なれば　[侍ヲ]いへいゆう
秋　若うとりるとるまし給へ思ひのそのれ御ゆし事おすし　やとし
なりしろの御本き海を
まみちとつきつるるる身のなさまり　秋　白丈に　薫恭
薫保ノ例とらし　白丈の御庄身を思ふ鳥に
秋　笠鳥に　薫保ノ例とたなり
今にぬれとこいつらりにくとらうる御にこれし　れひかりとしそ
むと　親云ふかうして一夜の哭りぬるもかう御彩星のひかりとしそ也
ところに一夜妹まある彩星も御中まうりてとかうんやい　のみうり
秋　年の一夜あん哭りなうきもやくし添楽こふさう御本とうさそて
くらいつ条みの染をと身のんなおりし給ひし
まちその時きて御さうらおく　宇治院事し
此時の御座との入事ま　平等院し奥
くいゆんらくとりふゆもちつさそて　河　海仙楽　又海青楽の
黄鐘調也　みる色ふよかたうり

是ハあふさの海の心にて　からかさ人のかんさしみ
何　いかなれハあかつきにしもそてぬれて人をまちつる月の出の浦に
笑　七夕はあすよりのちの心になりて人やまちつる今年こそあれ
今案白是七夕の雲の中にかなしさをかけし海の心ちしてといへり
まつ心をそへて申侍し
秋　月ある夜なき比の　幾日　　月のあかうなきさ人の宿し
秋の雨のあめ雲を雨田しおほし七夕ほとに文をまちまち人の宿
笑　待ゝ覚し
是ハまちつけてあかつきの　あはれさうき人をまち出し
人まつまゝのひまにしまたるゝ
秋　それ是より御出の不しかなり
内に有中是君白狩せられて
峯相の跡見の車の中
私白是の御供し参られ峯お中将の見なり
秋　夕峯の息し　笑
明石中宮し
小比ゝし泥きいしん月つれて
人ほの人をつまゝ浪戸に出る哉や
秋　同し古泉の浦の面
一番居石の東庄藤
居名世泊かはりハ出る浪の人を具すらし
笑　其の若湯出仕りハ必ず浪の人を具すらし
わ〳〵のつまの形見のこりまて
是も中納言も
手中将ゝ忍ぶなしと中是の宿し
白や　笑し
いかなうちにてもわか涙よ
又是君の春さしぬるさま人かと
是ハ盟日小泉の庭し中是より手わり給へし
何　明石中是の古事し
盟白を此連れ月あるへしとし
こゝにある御かへと申り給へ
笑　中君ハ白ハわりかわりし
御人り
中君より人めをつゝみ宿あつきし給へらぬを
うきぬるゝぬるさ泊まりてハ
不肖の人と待つ乃ありける故離き
にしうきを口おしうと思ひゝにれ侍ふ
白れおもひねとつるに又あらかしぬ
取よそ思ひゝあるまて
何とかくかなもなと人はとくくわしくとし
先ハ中是の人あなし
大君の人ゝこの泊へし
是するをいてハふきたり
笑　白是の人のそ宇治の是よ光にわたりも
無念なるへしとなり
網代なんひとも宇すせ奉りてなへて此本のこにゝき泊せ

同 六帖 あさくらやのなかれてとまる河しらす白浪もまたこすぬ日はなし

並 いそ程おし侍れはひとにほとゝきす何ふるらんそうをしは行をいぬと

水原云 庵下備まひとふたつ葉としくさをいし

くるゝ比のけんかはせ○のいとふゝりて

下はすても心ゆさる事猶と白妙の中にも○て○こもりゐて

ひらる妙の比をみるに　葉 八重の卯花

中納言家持をまくゆきのあさくらしたかうつしてまうさるれ也

秋 萩すくゝの中にしかまし

しかの里にともなかはしかなくら

萩ても八重へ栞りしつゝなり

おれてこしになるとゆるへらん

道まし御とへきとなり

うり思ひしみるのひのまよふと

何事もいねをきまへてつきて

うち御山にしれなけれはや

いつそわをおもふのさらにひとめゆしられまさへや秋そさひし

秋 伯露をまりてなり

秘 庭八重なりおもれて姫君

白妙の雪へおもひの御子せむとも

白れのまよひのまへとうぬ宿り

やまのさとの山かくれさへぬ[illegible]いさよれをこし

夫 夕霧三男源宰相中将事し

秋 宰相中将は夕霧の息也いにしへやのそノ字清てよむへし

ある所にと云ふく　うれのによみにけ侍て

うれ さくらしてそおもひにとまれ咲白にも紅葉もつ○なうぬ世なり

夫 桜をまちて花花落葉の無常をおもへるへて

秋 桜をまちて世の常る花をおもすこし花のうひ桜とも見え今の盛なる

まし也し　私桜の色紅葉とにさそいふらんて

眞名持 いにしへよる時をおもひ出山さとのりみちのけさて見えて花とものくと

時をおもふを　さいつら数よ折し侍

是は御らうり何としつし此紅葉のけさを見うしやし

京極の大臣　明石中宮大夫し

中宮大夫 見し人をなすき山さとの岩垣にんなうくもふしるらくとやの丸

不 見し人をまうれしも侍らはいんなうくもさうた御也の丸

同 奥山岩きくさすみちおゐへきてを日の比にかりの御時ありて

石を垣のやうにつゝる成し岩垣の紫岩垣清の事にいへり

秘 是は年ゆる人ゆて八重をみる事し人のなる所一来ノ何まみさら

本の葉はつゆなくおほえたし

吳 八月の頃ほひ萩の末もつゆしけくおもしろき頃ノ御まへ〳〵く

みえまし〳〵へなりけんいふなり

色ことひてうちうち給ふ月にのこく　吳 うちの年くに八ノ宮の御

箋 家のちまの祈ハ八月と定りしへそ別て色ちらうちの袮く

白妙 砧そうさひしさ添らる木の葉の吹ちらしてなまめの間の程

ほ尾ちをとひいつまとをかすし

是は松風の吹くちの枝ほ木にとゆしぬ白のれんとうれと讀る人道

ほの〳〵しるん〳〵を　以下ともきし　中君へうまひありすと知る

人の名月ゆえ準く白妙の思ひありをおもひ知るとし

うつゝせうこぶろてゆふ　うつゝの所治とふゆふと申しさ

紐女首齊とゆこうぶて添るとりふ見し萬もき絶く

かしこにとゝもつきよひめる宮のひと　秋 宮治乃家し

心ありけむつるん〳〵と　蕙より海り宮の御ゆえ家をまゆい

人〳〵なとつる〳〵し

婉君たなはかしにさく月ほ季の名をなるる法んかりまうと

河海 いろ〳〵をとおしまはる紛月夜のう〳〵しんたかたにけして

ふる同大君の白妙乃へんと申及ひしわさしさるほとおもて

男と云者ハ君云とそ　是ハ思ふの如とこの人を人のいひを思ひまれ

さうまとしき中にして　下流の人〳〵のをなる物ハ正れ矩とみえへしとなり 箋

もろかにかなるさつやなりとめ達い

くまとをして実なりけん〳〵とおもひ　上﨟なりとハ人〳〵をりし

あさかおほつかゆへに紛女も申つる人をのひて　かとくなり

なれハ妓も白妙といはふ〳〵しく申な玉の尓ゆし　やとし

うりんおとり奉る御心と　吳 中君ときとし物申かむとんて

うつし宮のれ人〳〵うちまうら所のとて　此女よさらぬ婦人〳〵みを迄

いとなやまし〳〵　これもてらる君乃心申し

さしとハ思ふに思いめし紛の附ほと　秋 中君し

是ハ右ハ対面し白と中つ君との事し

まりも絶さらりしそハ　中君やて夜ま去りゆまかれなりけり

なまねハいありとまて婉る　新 君たてしし

おひいつ〳〵れ紛のねかしと　箋 中君も出ひなく所ゆまと海し

色に心まてハかはらぬなり
中〳〵かくうちとけたるひめ君とつくしとくらへ給へりしを
ちかへりたに思ひしてとひたるかひそふ中君にはいかにとすまし
まいりし人も心ゆるしなかりしをひなりしかハ
宇治の宮の御住居の末うちわりぬれハ人よ白文のしらる尾
と見まふ大君まてうちたし給し
猶もまかるうくて　大君の事し
中納言のとさかへし給ま　中納言の給ふと大君へ宮までも人の
君ん給なるかへしなし白文の給ふ薫とも大君の心のひかゆひぬを
色ハ此頃はまたつきなし侍てそれ申し
うち人尾とさうこそわき　一度二度して薫へといひれ
けれうけ人この心おわもしえいとなと思ひぬるて
まつ人の心にとまる御よかる御まうらかきハ　また人のまたは小さくつね心
薫へ大君とは心せまへし給ひしと思ふことも思よは田中君の
事によこるま給ふとし
まうすれぬ人のうんめり　人しれぬうらみ人の心のうらみとのゆるし

うち給てしも中やかへんれいさあるうきあり　うれしくしと心にもあつく
八宮の御遺言ありしとあるにつけ大君の心申し
給つきん人ハをもおもれしたまへもやしれぬと　宮のれゆ心給ふ上ふ
箋
まうせしつきん人によもれしたまふ人とさゝ宮のれゆと云んて
一度ハ身として中君へ白文のあと資み入給も薫よ他はく學て
御かるに一の給とさ給事しみとせん人のおほえんことみ心のにさやう
八おほひあらしや　大君の身内にまさし思るし　秋の宮
心のとまらしにくるしき　也れい　秘 心も心もゆるして
これ君をまんにてやすらかのよそとと　秘 中君にし
さまの御まんへよ御し給へる　白文と云つゝこれよりにかう
まて給へしとし
世中にゆめゆめしうまいりの人へさ給まて　中君の事　と御覧とも
かなしとて大君かんなひつかはかへんなり
なく給ひうてこうてもあつさもしたよもあはれや　大君の中君と
二人の心事と思ひて
又ま給へうまいりやうに思ひて　箋 宇治殿御給ひてはや

宇治へおはしまさむとせしを
ゆるかる御息所にも山里の住居ありとも　箋　うちは内裡也
秋　源氏語て以薫何らん何事も此姫君のこと也
宮まへの御おもしろく給ひたれハ　箋　夕霧の子宇治へ中宮の
仰まて御返事ありし人なり
右の君ハ其の六の君をうけたる　箋　夕霧の六の君也匂宮の
御目へなされしもたしかにてなりなり
おもしきのつし語となる紀ありて白宮の給へしことする
とあるとの事なるへし
まつ何よりてもなりぬるや　御ゆかりなり
玉　よの性のまうけきものてうひをいふし
又こゝのうしろやすくや　吳　八宮の事也
此君らの御まさ内侍おひ　箋　大君中君也
弟もなやみくにとりてて　箋　白宮のあれからみ宮御むすめ
まつわりかくハもれ宮の中つる　わりさ内
箋　薫ハ大君をと思へて大君の中君をゆつりへし給ふ一段の所

又人わきせぬなるへし
いつまてもまちみまして　匂宮へ入給しハかの物語のすゑにて
宇治ハうしろ白宮をも御思ひの薫をよろしぬ中の御まへ
うらく姉妹君をともにまつおもひいれんかへと後悔し
どうへてもあなかしこや　とかくてもあやまちや世中　と
またきかりつれのまう御とむらん　吳　同
宮はましてけんすくかゝねおりすく　秋　白宮也
おほ宮へわくかいそこに参らせて　秋　明石中宮也御事也
若宮へわくかひてへましひとなかり　箋　内上
まうおもや不思ひまゐらせまいらせよ　箋　白宮をさく帝とれふそ
若く立て姫君の御一流ともなりて御ついてに右府にひかれ
秋　此度の其宮かりと白宮をさへ思ひまいらせ給ふへし　箋
吳　白宮の事なりいつまでとし　わきしの中宮也
大君をゆるしの御くし給ふ
時雨いましてやうれ給日　秋　十月也
まいりたまふれさ雨なるへし　みとるなり

廿一 女の御うたに　白氏は〔[illegible]〕

箋 白氏女御兄なり　白氏乃人は世にあらへおもしと思ひ

ごしおとゝの頼忠也　弘徽殿の女御たちし

冷泉院女御姫君をもちてそ　白乃冷泉院乃姫君へいまゝう事のかたし

うちなかけるに　箋 中宮の御事を思ひおかるへし

故山とも人をうらめしからぬ　頭 なまめかしうともえてそ

見するとことは　秘 兵部卿のうへのこと

よみ人つかしてをぬきて

箋 宮の御事にまゐるとなり

見つる中にかくしこへ見てまつりと　宮治へし 絵筆

秘 此絵を宮治へひまつりたへし

箋 さてこそ絵をかはして宮治へ御らんとなり

兵部卿のうたをよみてこそ

同 伊勢物語にもいかにこそいひしものあはれしきを見てとりて

うつくしき絵を見るにや御帝とあのむすめに見せかしみえはかへ

とらせこそしかへしに

初草のなとめつらしきことの葉そうらなくものをおもひけるかな

見れは伊勢物語に兄妹の事をよめり　是は同し河海にもいへる大和物語

伊勢物語乃絵なるへし　見れは河海にいへる大和物語にも

源氏の大和物語にかきたるを河海にも引り

さるを大和物語にいへる河海にもあり引見

秘 大和物語に此事見えす

箋 伊勢物語のかゝれたるを

いまへの人をさる人にも猶るて〔なり〕　白氏は御

ゆゑある絵かしきを見るに　廿一 女の御絵そのかたし

初めにかかれまへ　秘 白氏の初めにて

まへりをそへてみる人へ　別段なとといふなるへしとて

世の人は〔[illegible]〕毛詩にも見事父母をさとしいへり

毛詩 唐風 蟋蟀ノ詩

白氏 〔[illegible]〕

秘 ある人〔[illegible]〕

秘 〔[illegible]〕

これなどもまことにたゝる事のして　秋 白菊なり
ましとこそ侍るめ
みとりまて　兼 女一宮のおはしましけるとし
秋 女一宮出御御中なり
うすく物そといしめつ　花 左中将の妹のなまめかしきうと
れ葉そといふ事がされてめつらしいひすへは女一宮は白菊の花をり
秋 伊勢物語の人は妹といへりてうつしきにいふ事は又妹の心 ねぬやし
又御よりひめて事あるにたてし香すてみるまゝにて侍るへし 事と
といふ事は物語りすといふ事なり
むかしの人はまことりまさて　秋 以下古事を記し
これ二とこ侍るも　女 つま白菊なり
御心に入るに申すなと　秋 白菊のれん心
女一宮の御ちられ女房なり
彼まつりとお目のまうすわなまさ物し　兼 宮侍へなり　秋 宮居事し
中納言おりしかり
かゝれしもにしくわたと申て　秋 大君なり

おち侍なりうちけさのとを菊のきつる事也　秋 萱乃初し
たとへの菊のつれし
かいりにおほえとるもの侍へと　大君の侍りしん御さま輝くと
おもほえんなり
又れ出ひとゆて取りしるれ　萱の初し大君とよくいふゆん
物の人もくらけし　取まは葉のれん御はてまつらせ給ひし
夫 萱の侍し白菊物のの宮へあらし御さて御ありと
うにはてとものくさも出し侍りしあり　秋 大君出御初し妹君なりて
何事もおもひ物をきことなり　兼 兼
かまさへ出ん佐いうち　取菊物白菊とた事かしきるより宮ひて
うらくの物し物の不宮ひしにたらうさうしとし
いまれくるうち事さへまつし地　秋 萱乃心し
世中はそてもかくても一門は御そて色をしるかへて御世　秋 萱の初し　兼 業
業 物を侍り退屈して一異りんとうれしらすしてとし
御らん中ちの侍心ども　これを世上を知り物をれすてとし
人出御うへと侍へおり　秋 白れ何ごとうとれおていひ一夫

よろしくはまていとくるしきに　大君のまうしひのさ給ふし
うち伏人を君はきこえひれちかくても　箋 薫のちかくおほえ給ふと申す
くるしけにおもほえて
ましてくまてひとかわし　薫ノ詞くまてくひれ時ふに
れまうに奈りひ給ひて思ひ給ふあらんわかりなんのなし
うち給ひ給ひれあけひて　うれふの詞し
いとくるしうとはしにもいとらしれ　秘 大君の心
思ひさ間なくいのちんを　覚ゆれともなくおもひ知らぬ
やれんは心り大君の命のおしうらめは絶給ふと薫の思ひを
ちまし給はもいりをとし思わすやうにとりし　仮注
なと云ふるとも大君まとへいうかし
又思ひ給ふ　うれしの宮給りし御かり給はれ豊釣し
此ならかく思はぬやうしさせんと　秘 給ふおもくまそとく
呉さみてかのやしすてちかくてとなり
日此心ならやさいとくるしくやせん　箋 大君の心ばへなり
日ならはかなし人なくあやしからなり

さらにうるさしみと　秘 姫君もいとうちとなり　呉
いとこのうちれいつのし給へうたり　うれうて
おもしろさはなかりしれはなしさ　箋 死ぬる後への事を給ひ
死なん事のなかりけて薫の心もうちまてもつけ給し
くるしうてえやのしき　大君の宮つき給し
なけきおほさり　うれうのさ給し
いとうしはやうれしと思ひ給ふ　秘 薫乃心ゆへ給ふて
不さり給ふことなせてさる人へき不よ　箋 三条宮へなる人
秘 此次て小車へうし思ひて申さんとなり
此君も給ふともなき人ゆへ　秘 うれうれ能乃人なり　呉
箋 薫乃家人女房乃友ふ女房ふるうひつきし給はまうるし
彼是思ひあつきせいせられ　箋 白まの給ふ中を結ひし
古れ給ふいとの姫君を　箋 夕霧の六君に
せうはとうし給ふ御かい　秘 六条院のこれ人の事し　呉
私夕霧のこより思ふなりされ事おのまみてぬり
ごれちにまうぬ給ひしなり　箋 当年中とし

あはれみて夜あかして　白きは六君の事を思しいまだぬとし
ゆゑなかにとりもなほさず思しこさ　白きはねのわかれとし
まことなるをこそ　秋 薫し　兵　葉 我ら思し
こゝに酒のみつゝ　薫の仏宗治かよひの事を人々の不二露とし
目をもにやよおもひの中にすまもしぬ　秋 かくしてかりくる人々の心おもひとし
目をもおもふ人々の心さへにかはりなき事し
さてそいひつまりなとも人々の中にもてかへる宿と　かやうに修りつゝと
侍るみくこうれ人々の中にて心も浅くし
兵 又女房の侍り侍へし
こゝに姫君にいとくも心つくまで　大君の御心ながらも　兵 葉
今いふ侍りにこそ　大君のんて
中納言なるの思ひんあとありて　葉 薫よりも心もりてかへ
かりとさゝ宿くん深くらさうれのすゑと大君のおもひのすなり
これらうちに宿のおもりしなり
世の道と侍りめくりをありし次　見まゐて大君の御中し
さる御屋にまて孫のすゝへきと　大君の人々の思ひんあらむかし

くてさうぬさ宿まて寝のまへきとし
葉 さりしうちられ人々してことよりさらぬ屋にまて寝のへきとと
いつきまてたも中君の心おもへしこゝ御侍し
姫君物むつ附のまさにさしかゝりて孫君
兵 常のかたの君の心の内おもかりてさしかへりて孫君の御宮の府のまさにこそ宿
しつまぬくら孫へしくし　せ斎まて互宿の世のへぬり　葉
兵 中君のゝすし　し斎まてうきり
私なるに姫君とは大君にしうへて孫しいふ中君し
中君おひうて孫しへのなともに中君の見へくなれへんなり
見ゆるのかなし
私は竹前といひて中君のうへに孫也しと大君の見ゆる御宮府の
まさに心中のしうてねの浦さ宿のいとあはれなりけまそうへ是なと花
みえく孫の宮の小所にしれぬおもひとるかなもあるかなし
ゝし宮のると姫君のやりつゝ竹前の姫とある姫君と言
乃いふて何事へし
あやれいさめしこの葉もうへきへき思ひおもしれすまひとく

集 敬愛の遠忌を営むして了翁の句をおもひやり
つゝ涙のみかきくれたるよもすがら
ある夜のさびしさに仏法の後世を思ひ帰り 集 故愛の事 其人
をひ帰りし物の音さへ今はた
むかしの影風のいとあはれに
なつかしき君にかへりし物の音をきく
秋 中黄の香 其集 秘 中黄 其人
大黄の遺言あつき芳香 抱香 むかし物の香
いかにおもひしまさぬひて
うき世はかく後いつまで夢のゆめも
人あらに見えかつかなり 秋 大黄の肉
集 李夫人の顔のまたも 夢かとも見ねど大黄の香あるかなし 秋 反魂香
花 十洲記云聚窟洲在西海中申未地上有大樹与楓木相似而
花葉香聞数百里名為反魂樹死屍在地聞気乃活云々
九華帳深夜悄々　反魂香反夫人魂　夫人之魂在何許
香烟引到焚香処　白氏文集

他國ヒトノクニ 李夫人のなき後漢武帝甘泉殿の裡に彼うつしゑ
を写して方士として反魂香を合せしめ金炉に焚しめしかは
其烟のうちに李夫人の面影かすかに見えしとし　かの故事をもとなれ
けむ 秋 聞香のうちに抱黄の匂ひなく消えめぐりし
御とはこゞえにもまれあはれ 秋 大黄の香りて
物の香の匂ふ 大黄の扇の 秋 中黄し
うつり香もなつかしき君 大黄の秋の香 其集
あまりなうつりかさなりに 集 白妙の人の思ひぞ
てなく情なき仏のあい 心はいひすなる事もまさ
しさまの人なかれて 其人の香ふかき白妙のいとしき
おもかげの人々の香 我
あつさんとおもひけるかな 秋 中黄の肉 集
うつり香の残りの悲しさ 秋 大黄の肉 思ひ出
まぎれてまつてはしさまて 其
わすれぬ世の名残のあはれ 其 帰花の事し 集

秋 大君の事し中宮御まて命をとめしなれとて
行 あはれしぬる身と思へはこそ惜まぬものなれ人こそ惜みけれ
箕 引哥の心おもしろし 行ゝ おなし
世をのかれし身の中なりし哀なりけるとて 吳 中宮殿まてお身の上
行 出て世の山路へ入らむにはおもひこそほたしなりけれ
箕 其後引哥に 秋 引哥同し
迷ひの道やかく 箕 句のみのさ也
白雪 迷ひはあるまし憂身といへは迷ひはあるへしうきと君を思へとかれそ
秋 今日の時雨はまれしもやかく覚えけむ紅葉をこの山したしとし
あはれの思ひにもみちのしたしくし
く袖を引合せ 行 いつしかもしのふもしものを誰と
く袖を引哥おりいるかなしみ
行 神無月いつも時雨をぬれしとかく袖を引哥おりいるかなしみ
秋 神無月いつも時雨は一 引哥をもくらへり
吳 神無月引哥おなし
箕 引哥 神無月これはとかくの時雨なりしもあはれ也となり

見えつれしまたかく 秋 いつも偽りの世に迷ふ人身として
なれはわかしことし 吳 当世はいはれたりしとなり
秋 あはれさこそとなりけり偽りをてふへしやし
箕 吳の義よしなれはさりとそれんし
世また心を佛道を偏くくら 白の事し好む人との道
身をなして始ふをしふなり白雪は人の思ふ身のひきやうを佛の道へ
まつさし人思ひ合せ 中宮殿こそ心をなすといへり
さらに市をも住ますて 秋 中宮殿こそさんけしとも少しのつ見ん
思ひのへこそさはおもひはさみなれ
心ひなはかく心そでひとそひたり 箕 中宮殿こそいはれたる住に
あれはことにひとかりかんと 白雪の以後の人に随ひ参らんとし
あひはなしやまのさとに住ては身をもしもの心もちかくらし 門く
秋 夕を時雨といへり山里にて住さんとにてり
吳 見山中に家あるしかのなる身のかなしさのみのうき世に住まて
行 あしき世の中の深山の里の住ひ(?) さこそてさへやかくおもふへし
月をみるとこのまゝめつらしき十月まに御事にて治へかへりける

九月十日ばかりおりゐせし

宮ゐんなく

さえうのおほとのなるほどに　　　異　白家し

河ふれと入れ芦分小舟さはりおほみ恋しき人にあはぬ比かな

おほきおとゝはとしころあま年に　　秘　女院の大臣にませてさえり

おほとのは八十一月新嘗会に大臣小臣と衣裳をわけて宴をきこしめさて

めゐんなとにうきつきたる大衣は中の丑の日は辰の日に

丑の日なり新嘗会は中の卯の日也　　十三日

えられんとおんまふまつるとても

次ておもひしおほかめり　　山里のいへとはいふかれ

箋　あまりこれ人にまうさんか尚是人のもとにおもひしまつてし

大やとれさるおもひやられけむうし給ふ

箋　六条なるやうにはるかにしきへおもひけれとも推しきはそれ

ゆかしへとも宮へ中君に宮申給ひしうしくし給ひし御わたりから

給ふなるの御いたまはしめさすれ　　秘　明石中宮し

申せしにつゝしめるかは　　秘　中宮へおほせらるゝはかなひし

六条の御息所の女し

御んとおもひ給ふこと　　秘　白のはんをつけ給はんにはおほつかなきことにし

中納言もとしおもふと　　秘　葦をし白家をとはんのおもはしく給ふく　箋

わかうおほえ給へし　　異　おほかれの中に是非すとつけのおもはんにに

わかくれまうし給ひ次　　箋　葦の服色ろそて白へ年まるかはしとし

山さとにまつふくにや　　秘　葦のかた中臣をうひまてふて

これ月となりては　　十一月なりへし

おほやなをよろしく神さりにし　　箋　女院の大臣の御後なとりくへし

うちそて御かそて給ふに　　袖　箋　御事かたはかりて葦のかたへおほうし

そこかやけ紀のおかしく　　箋　年年宮付し大葦にやまつかひのあひに

さる御とかいへかやうにて

これ大臣の御事　　異　白家の事なり

白めかしひのふ事なり

ぬくゆゝしき服のわたりさまて　　秘　さりおもし

ぬうかつ年年宮の宮御葦の事はあは給ひし

秘の八年宮にさはの宮の御事とそれへ

あたらしくともつゆ給ひはさよならへる　　葦のおもはさまてにの給し

あしはふたに入まつ　　秘　宮へわかへ入給しかし

御しゆもとなまめ風情ふかく　大君のまた花さ海し
くおりくらま頃ふすまて　篝　菫乃朝し
まいかの河原楽　宮居乃河原利栄し
就いのあるきにと　まうか居乃きなきやし
中まるとやあら御ゆれと　呉　菫まちは花すまし
出御中となりてたれまてかね　うち乃姉君様の
そうれのほすしさかうかいかり
そうしもそういまて　大君の庭をへ乃丁のうへし
わらにそれ御なきう　竹乃朝し
みもうれしやそうた　大君乃朝し
おまつねくてさ待かね　くさまやと　呉　姉君の方々
うゆかれなてまつるまと　秋　菫のへと
私かあるの朝し
さくうもとやし　さくるあらしましていてもなく庵し
私まちは御心くもまいるといふりうて庵とくにまうれ
御かしうをまりしあれや　秋　温し

呉　うらに温泉乃おうちをりふなり　秋　菫乃朝し　篝
なまめの頃なる御人花すつ　むなきは
む　見こうまの神なうれしくさてしか恵心河ねの頃とやなも
むまのをひしまてそ　菫のへし胸乃頃まくいて純さ海し
呉　見ゆれくてまつり頃へらん　秋　中君へ菫のまり頃へ参し　篝
さうてひゆらんてさしまあんと菫の宮へ参し
まとうしもそうき頃へき　中君なまへし
秋　わるおりてかいあしのひと　秋　わり参し
いとるしうかへりゆれし
紙のうぬうぬりかてへたゆりあへて
呉　白菊りおりひへうふまいは菫もあ頃へ頃なまるとく
少ひの海なうしやし　菫乃志の念頃なうとかひあらぬやうるる
おすひて海まそとしやひて海すうしとい志まん深さ深少ひ志ゆ
いそんもうくおりひなへり　篝　わゆれへし
篝　所思楽もよめりさまつひて　秋　白に少ひて妙連
篝　夜居の仰ゆとよまし　所　夜居し
秋　大君のへし

きえしあとはいかにせん　宀 きえのこりてあはれなるべし　晴なし

くりつきて　何　切付べし　叢 まづ悲巻中にあり

秋 切ふせ入てなし　秋 何ともおもはれず

それとなくふるまひて　八月のすゑしきりに浄土へ

ましいかにもたゝずみて

さいはひ安心なん　何 近留 サイハヒロ

いさゝかうおもひしらに　婚君さらぬはなむなからへし

ぬしうすめるにあらひて　偲ぶ心にてひてし

何とか業のおとはよきうひなからのとし

なおほし念仏ありなん　何 何とての念仏とはいふ

弥陀念仏の事し　天台疏論　念阿弥陀仏即念一切仏

法照禅師至五臺山至大聖竹林寺逢文殊問末代凡夫修行難

成就願断我疑網　已上　文殊曰諸修行無如念仏照問如何念

文殊此界西有阿弥陀願力不思議

常不軽（ジヤウフキヤウ）とぞなんつゝせ給ひ　心ひとすひなれば命もあひつゝを

秋八月のもとひまに常不軽の行を勤しと心づくしの事

秋 つゝせ礼拝のこと　我深敬汝等不敢軽慢所以者何汝等皆

行菩薩道当得作仏法華経常不軽菩薩偈トアリ　如何

釈尊因位にて不軽菩薩として此四字の文を唱へて四方を礼拝し給ひし

一切衆生之仏性を敬ひ拝み給ひしとぞ

君をいはひ祈る心の事

叢 これは君の事し　奥 婚君の事し

この世にさへさ迷ひける　叢 これより大君の御事し

さまよひ給ひさうらんさまはかなし　何 詣し

花 三有とは欲界色界無色界の中に生をうけし迷ひの衆生を云ふ　とぞ云し

中略して　大君なり

此行ひ給ふをみるにつけてもあはれなるべし　それを何となしと

此行ひ礼不軽菩薩のまねびして常不軽の文を唱へぬる

いとあはれなる事なりと云し　何 礼拝の事し

さらに心を清むる　何 廻向し

秋 我深敬汝等不敢軽慢等之文なるべし

御くりともしるさふをしみぬれ　秘 薫ハ仏法ニ帰依也
せちにおもひへだてたる　箋 中君の大君をおもひやりて見えたる
あざやかに居なをり　弄 うれしくおもひ(?)
ふさはしからぬ事ハいて　秘 うれしき中君ふかく思ひて
おほしへだつらんにや　弄 あきらぬ事ともし　箋
霧さめの汀の香うちそひてかをる　弄 さればこそ
　弄 木幡の里となく 秘 さるべき人あまたあり
秘 薫乃奇異き猶常なくいはれし法の道にかなひぬるも 此君をとられたる女房
まうて木幡乃前あそびて物語の本にも毛詩関雎篇の
とも后妃の徳といふとも雎鳩の事といへる類也
なさぬかな人ゝ　中君事也
白雲にかくれて似るやうなく　弄
通中君 暁の雲のかかれるひなくすねる物おもひの人々を御ふくやしれ
折にふれ給ふ人々の中君をおもふの事也　弄 箋
小河のほとりにぬ所なり　秘 毎に待人ある也
夫 是を人のいふまでのことくも申すといへり

やうれふ句もなし　秘 中君大君の事といへり
秘説ハ薫の心を匂宮に伝へむとて 大君の御心をおしはかりて
物ていひて御歎きのふ事とし 又中宮の御子ハいふまでもなし
とも大君のあはれとおもひ給ふらんと 物をもおもはれぬ
こそたゞおもひの経のうへの事もなし といひつゝ思ひきこえられん
薫の心に得なん
宮の御方に御心ふかくなさけあはれにかなしくおもひし
秘 薫乃心に深くしむ御事なり
うるはしきあたりのさまを見給ひて 姉君をこそ御心のうちと添ひ
くるしきもことなるものと　弄 中の宮に心よせ給ふ事
おもひまさり御事也　ことなり
まことにひとりおほいなる御歎きなり　弄 八宮の事をおほしたる
とこしへに御方ハこの世の御しるしを御心よりむすびて
御母屋にもまろびにて御いとほしくおもひて　弄 是ハ今の様に
秘 薫ハ脈ありとてむつかしげに居給へる　箋 御中ににつきて
脈をとりてみて宣ふ事也(?) 一首にて十日ばかり

㕝 暇文

請假文若干箇日　暇文トアリ

牒其㝡取請如件以牒　治病之人者治病云云

年月日　官位姓名

きうかをこふしるしに　大君の御ためと病のことゝをかきて申
此文のやうにかく　其かりそめひ君のつかふ事に
今ハまてられまゐらせらる　かくのごとくに祈りて申請し
祈りて薬をいそむことなりける事かし　やむ時は大君の御かたに
ここちもくはんさくてつかふまつることならぬゆへとも
大君の御祈せんとつかふるを尼にゆるしたまはり　薬の御くすりを
いはむことは御事にあらしやとまゐらせぬては御ためひよわひあやまち
御身にもとより　白妙の事にはいかにして君の御祈を
心ざしをもとめんと　などか寂の事
秘 尼ありなんとしけるなり
いむといかんとするしるしてゝ病の心をきよくしくさしと

いむてふは受戒し　女の戒を請ふと云　ひとつをひとつとつゝしみてさけ
尼となるのみなるをとらふなり
御ありしくるしも中つゝゐるは
くこりのあるく連ハ　薬のやう治にあらはるゝやうし
きてゝ　やすくなり　秘 薬の中にありねし矣
あらたまのしるす　ささやいて
ごよのかわりハそろしくて　豊明節會　一本日ならず
宴の字をとらぬのありやまで御さかれハ何の宴をもいふ
但是ハ其前之宴の事
秘 辰日之 矣 策
うとくて尼とぬくへきかや　策 大君のすゝしはせしは
やゝおかなる御事とて薬の心なり
御たうしやくを受いふ　いとこ尼を例をかりて
といふて　遠例之　私例をもとしては寺中にてとは後の
日のりもなくて　雪の御治事し
きぬくりの日敵とみてねわくしるさんとくれは身をいたり耶

秋 光悦宣言られハ日経人々とく御目なれて
矣 高光集おとらせぬひとつなし 新掌会れに候由（を御方）て
内外人々ゆすり 君それ共よりもさらに申さしくより
まうす日新とあんぬそうなしき
今案新掌会光明節会にハ小忌とさ衛人出させねばよ
物と冠ふうく候し 日蔭をそとは菖にを京本て
如むひくろく候を申け共れうとらるへし 日蔭をまそくるや
志とは日本紀中ニすゑこれらるまてとおこらなし
世にいて西院はと うけるよく物しし
いろおほさ給へし 秋 うれしの大君へゆめて
こころ強へしさらゆへ わまつる物をと此事れ
紀光よりにて高
私大君れ振舞なり 秋 大君し
よろし紀知りもかハ にもし紀まさしにそといつ思まて
大君れまし楽し
いまし世きらてあうって 矣 薫共之事

桃より出ちぬのさきま此浄やくりて 奇物なるおさ候し
おしこしとあるへしいかし 廿一段大君此府の柳薫の人申へし
此まうらえそ語るくハ 是より薫人紹大君人室すへし
んくるしくてと候り給うん此事 秋 中君へ 矣 薫
いくへを打女事うんとて 大君此居苔とゆくさて
中君ましるすといひおもし あるへなり
くるうれかりきた物をと 大君此胡し
不此ゆうしゆの下に 中君と薫へと出りしにさるな
とおもるへなり
多くもい行しものうらいう給風まくうる候し
中君此薫の心まかうにそおりせハ大君をんにはまうらて白矣
御心あるへしくて物をあらせあんたかく宮すへし
かいうしう物思へ后さ身うやそうも 秋 薫の胡へ 矣
ともすみしさをと 大君出たかにんのと候ぬ事を宮すれ
我を仏とも称んせさ給のすと根本し 薫のさ候へし
まくめ給すへおとをき 薫と仏在（まへや、まんとの佛此立位さ）

さのかれはやゝまて
あまりをさけなく　大君御局のさ御し
河 伊勢物語よりくらし女のもとへまいりてうけたまはり　筆 かりのれんと
呉 いせをめくらりれんと
むさしにてあり　秋 中君を遊ひあらし
中君とのはぬまなり
くるうし出ぬうきはやしわく　む 蛇し出ぬは夜にまうさとおし
河古 うけたまはるくとつゝとさくさおけ源氏の山にゝうりゐぬふさそて
秋 うつさといかゝくとつゝとれんを　呉 筆
あきうさもはかめ人さ姫し　薫の物語の祈とあり
定とおかの母おはしまし　筆 かりのれんさ御し
む 御法巻こと此月の葵ともいえとそうまてとあり出まし
見とと定まていへよしのこまれるすし定ともおもむいんれ不
出くしうくしあゝ称し
にすりをおれくむまか地あり次　とおく面白き詞し
む はてまり紀れ君居させまつりひて出れゝの仮あれは置かの時の 結し

むまおりし御しほうしもうく只時のまにおとくこともうくなれ御し
御いとにまれしある人　秋 かりあれましい御をて所よく見るさと
あけしそ所れんり化を　白文れとくらけまはあふさや入れ
よは谷をひて大君をうらせ給ふあと中君れ君まゐはれ
又なれひをふかくかよ　秋 角しひもうさ人とし中君を
くれ物ゐひするさ人れ居うふ見ていつし
秋 大君れあく所くあるき給へ御孫まて中君もえなれへ姫
へきにほとふ不思ひなしきぬふとなり
文よりも御とふひ　秋 中君れ事し
筆 白文よりこゝにしとゞつゝひめつて
思ふ所よつゝしや　秋 中君よこそ人まうるすし
おほしい御して　呉 あの君ぬり
いゝりさん君れゆうりあり　中君の白文をおもふんて
此君ありの事れ　筆 中君れ事
かれ宮ひし居らに　筆 大君れ今は人時ののいひし事し

ちこれんさ身とまけのへりとこ
夫 婦宮の下の心
うつ誹ふへ今はあわしさりし
夫 うりうのんて
よの思ひ文をまきよりは 中宮の白き衣をのおもふるすし
おんつる涙字うし誹へと
何 孝衣之
うきうの宮は流そのなとれうつしぬと
薫と姥宮とは一さひ
れ契りもな紀成り 服衣とき誹らねさし 夫
紅よ蔵の涙もとひなすまうこゝろれ文とそへぬなより也り
秋 本書よてな紀成しさふ婦人つくれさくう宮とう也と誹る之
私契りれまうし成よ蔵衣とまゐうかひるすしけ妬へ
ゆうしまれおもはぬうけてあゆうとといとしぬしうし世へ行し
薫ゆるしほとまえするれおつう後けと何ぞはし涙の紅とゆるし句より
よもへしいつるれねとうけぬとう涙よのまよるはしよや袖のつら句とき
秋 紅のうちぬい本れ宮にもちし何涙す涙の本まひなし句
柏木へしにやぬうしそへうかいしめく涙のすといつり秋也
宮ぬとゝるゆうはうちゆぬれ文涙やとりふとん歸へし
秋 花の流むこう池とうしけぬるをさけぬとむへ和の水みゆうむてそれ
どけぬまはあれとけてぬまとみうんるうしされあし
秋へ後ことひつ 薬
とけぬうのとうもり涙の筆にもさあらん紅のさぬとうちうう
きうなすへしそへゆうは涙の筆こし
ひとのうくるうひ うゆうに薫の女りしうれぬかとさし
成のうりんとんへしれおりびなり
このあうにうさもうしれうらんよ 秋 薫中宮へ下誹ふて
ひ宮のうちやうるれうつに 秋 中宮のうす薫の心まし
秋んむたを中宮と大宮と薫のおひらくくまふし
よの人宮きさ一犯事に 夫 宮の月のうまれ雨後より
何 清の納言梅事すこさ後まし一さ九宮り涙の月程おうる娟
さし 嫁し毛妃れ事立帰
蓮をまゆあけてき誹へいもうひの寺れ鐘の声は梅とそちらとそ
何 遺愛寺鐘欹枕聴 香炉峯雪撥簾看 楽天
撰 山寺れ入れ宮鐘の声をきにぬふもらぬとさう秋つうし 夫
出 夜の雨とふともくまぬといつう夜の雨て所りれ宮うんなり

秋 更衣にてきゝまゐらせしはいかにそやそれはわすれぬ人こさんまいつる也

秋 夜すがらめでていつる面白しかなしくられしとも過ぬとおもふなるき

恋し花鳥の徒いふ 案 吳に古詩古哥をひしなり

吳 なにとそられぬと思ふ今の世にあはれ古哥の人を殊の種とせしさ

うれ あはれしれ 空の月をながめてなれ給ふにさむつくしこの夜なるらめ

吳 うらみの哥し

法躰見を待せむとまつことなれる人とかや

吳 はるかの山の滝とかや河のへや

はるかの山のうちんとてもなき

見月影すいと面白し面統何事もなくとも志とも都のねさ給の

又別当にてつゝ見んむかし滝とんむかし此羽面統き面白思ひなりにや

秋 此羽やの所にて面向にあり鄰おうさねさ給の事なるへし

出 雪の事也山は滝をかゝるといふにおもひこそすなれ

見 はいかいき出しくをのし給ひなりとい 秋 まつ何しても

こと面て思ひ出ることし

うあり 恵まりひく志めり葉のゆし跡にまつの山にやあとしも空乳せり

吳 同面首同雲山中偈を見し見非也事 昔云雪山

薬のやうそのうしされは死ぬ葉のつへしやと面白趣向なるへし

かようなる偈をしつゝん見もられと 法師無者の偈のうちの

うつるれんそ此世より跡をとゝめんこと也

諸行无常　是生滅法　生滅々已　寂滅為樂

涅槃經云雪山童子求法有千尺夜叉現半偈先說彼同以來

半偈曰飢未能說曰食何新血肉童子為法及捨全身佛國中

包夜叉帝尺化身世中阿含經涅槃經說同之仍略之

んさしこらさきもしのたんなりけりきし 法 んとも月を捨たしもして

半偈をとおもの次見すあとり(?)していつる也と心さしこなるき所よりといひて

まのゑのいかのおいかにあて

恵まるいあのしくらおもしう 秋 恋おやられいつる也なり

私こゝにさえの面んくれゆかれ也とおもふれて

面て此里の御事をおもひ次より 白文出の事し

さまにうし彼のゆかりにそらしとおもふかや 吳 婦哥の中のにも思のし

何ひなうしん出るれうへと 中哥の事を婦哥れおもひすもて

まんのうしあちこきうけきことは 吳 うらみれんて

何人かゝる浦さ夜中に　　秋　宰相中将　尚侍の御方へ参り給ふを
まけてとひくらし給ふ事も尚侍の方へ参らんと給ふも
此まゝに宮仕へ出し立給はんといつれと思ふ尚侍には
えうる詞もさしあたりて此事にかゝつていふなり
宮の御かたちのとまらせ給ふといつる御物語なし
まつりの所をみ　尚侍のおり衣をうしろへやりて給ふまし
御いとは日の次第をもはなれと　秋　御中の日のうらく　冬
日次のつね侍りまほしきけるめしへ　白の御衣深紫の御ふくの
日頃の御はかなきものうしろをみ給はずめしへなとし
先へ歌を書きて御返しかりし　是は中将の宿所
の御前をめさせし歌なとはいへと思ひ初めし給ふし
秋　大宮の御服のことを給ふに御かへしきつるに
見なすまそれの事とも　大宮の御なきのゝうちに尚侍の身の乳
主御なさる事を見せ給はざりしと御遣しは中将の心を
今よりの清のはんあるゝ御もの人は　冬　是は尚侍の今よりの清忌
何事も給ふもの御けしきのひるの中将のうちへ

秋　尚侍の人の御心もかりなかりしみえたへしかし
冬　少将の御事もし御心あらしめしかなしと　尚侍の白川の御方へ給ひし
日頃の御中うれ給はせに宮仕へを　中将なり
つまじくと申す侍りつへし　秋　中将の御恥かひしの御心をさ思
あ情もいとまうなき也さ　人の事を尚侍の御身をさて
まてれ給ふにもこそいやせ　内裡にさとの給へてんなれとおもし
かくて御身をさて
いらつれと給ひへと　尚侍なり　中将よりの御返事
今まで御事御ゆる
人の御さやうなる御事もてなし　尚侍の心浅き事し中将
つらきの人へして見えし給ひし詞なり
あつかうねさ御心をそふらうへしまり給ひ
冬　うへかへさへと責め給ふまうなし　藤の花　秋　藤袴の心を
うらみはる御さいまとも御かへしはまれし詞よまへり　霧の笛を得て
冬　藤袴の心
御まゐりぬるみまいらせ給はんとなし　秋　うくへきうへる人みゆるかし

無分とハ此文をいはこ知り給ハさらん人なるへし
いかゝ造花の御心をしらんとてもかしこそ　秘 中墨の心ハ造化とハ墨
其うちの心をしらせ給ふ中墨の心なり　箋
元中し給ひ候　中墨の心道のうちなり
中にしさ油ともに墨の出来給ふなり　並 是ハ白文の中墨
其心なる候とも人とてさるうちさわしもんのかと給ふ
ますおもくすそと出来給て催さ給ふよ宣しく
秘 白文のよく艶る墨のひし無事し身をれとも人をはせぬを給
ますおすりてうりしれてとし　箋
人金りるしたなけさ如し　白文の中しさつかれ
人金りかしのし
手の屈流をかさまてかま借をつ代事を
河 あひつてその河まてにぬりあ是ハ手の屈流て身からあらん
秘 引寄同義其引寄見河海
えらしとえるつ手のしうりきり　私中墨の白をとひとるれぬ心
中絵 しかしこを出ひ生白をえるさ流の来をてるハ小の白のもん

秘 中墨寄しなふくらにく給さ他のをうハ名をし知こし
其 中墨寄へ　私さうしくるのそう白の出をとひ出るさえ入らし行に
又の末をいう外の白の白給ふたまゝし形のれんとは墨の中よん
白墨ハ中墨の形をと中にし是の形らんとと字をえ令領
さにやさかれハ白文のさこまし白の白也家し
其 まるてみまいふくていふやさく
中くりつまゝ
西白絵 形其末をきるとうさかのと出ひるるそのれ中にえさへとうさうあん
形末をとらしかし出ひ給ひて先只今の目前をとれをまさ給ひたそ　其義
人の出んまへんをいはん人をまへし　秘 白の御心
ますてハいうふ出のうらんや　白仏のとうく人いうの出ひ給ひつへん
出んりこして白文の御油をなすり　其
いや内をとやをいはんとをて　秘 かうのさ白く　箋
まみあやうみをふてひ給ふ　秘 白の墨をとらふてひるさて　箋
あしさ油なまとうひなせ給ふすみれし　墨のしむ大墨のをすし
此文にいよそ中のしめや　其 白文小をさし
うらハ出んま流てでてるもつてをかいまうく　墨のんなまつきまさ油をいてとし

あさかしひ給へる人　箕
うたかひもなくして　末　うちつれるすこし
せちにかくれたるにたりけんと　秋　白氏文集第廿にはのち菊に
んよりて下にも中宮これにはうしろめたくおもひまへ給へし
な満し給へかりけれは　白氏乃何も中宮をかりたてりけん
なまめかしひきてへなり
くつきなき作をのひく　秋　つきなく宮仕まても乃ひくゆきさ
まかせて給ひ給はん流にやなり
私つきなき御中宮事にて中宮は何きな御名も乱にゆきとま
すへてはありもの下にも白氏京へ入て給ふこと
つきなき御もとくるしきまちと　末　引歌いとそてまれしー
秋　引歌いとそまれつきなき人（ホし
河　いとそまれつきなき御人をもそくるしきこともおひえせん
以　おんくまろおもとうつきなき御はくるし給をのとへにえせん
私引歌拾花鳥に御すへて給へり
としれ高くにたるしめやかに　秋　宮仕れさ給なり

御らうさもいとほしう　秋　七日れうすし
は十九日へ
女よりも沼むさなやうなと　白文よるまし
うちて乃ちやりあつしきとしさへ　秋　薫の事也
ゆう給ふへんちも　薫のん中なり
かくたらしなりひとく　秋　人てれかうとおもへと
いらうれしおりれ　大君れりせ給ひし時乃お
時とおり物しおしやれ高やとれ　秋　時とは清へし時かし
薫は女へ八女の御時より前り給ひつとし
あり乱さ事にても油わかれうたにも　かの御れんすらなれ
よ御ちゝよへて　れのなし
彼女の中は猶うう気かりつ高ことも　白文より中宮と京へ
まうし侍んとし
こさ給いの女さとこしめ　いは中宮之　末
中納言もとくおかうさんは　箕　薫の大君の事と深く思ひすまし
御かたへてなりひかうつしそいかれとおほさらしそゆて

葉 中院ゟ白川の御所へもと申されしかとも斯の人々姫君ゟ入はしめ
御所にて中宮の御としかう被遊候て
思ひて申し被下されて　　中宮を二条院の西の対へ
被入と明に中宮の思ひて白河へ御うつし候て
女一宮の御事にもよろしく　葉 女一宮の御方ゟ白河の思ひ
秋 御事を御なけきて思ひ参せて宮中にも御ゆるしなされず
さらに御人々おとしまいらせて 女一宮のひらやつしなされたと相聞候
御やと白河の思ひ出して
相同へられたる御しきいの御けしきにて宮中へなされ候なり
白河の先二条院までまいらせ候て御のこし候て宮居へ御めぐ
まことに御とりつくろひもなく前の御し 右の子細の
中納言とも申して三条の事を見せ候て
扇ところ三条の御所へ申て大君を一条に
御かくにをなされ候へとも　葉の中院の御事を申し
私かたられんかたなく
宮の御所とも見ゆるに　中宮を二条院へ御ひとし

秋 まことに宮中の事をおもかけし事に思ひ出して
白河のかたをとかく思ひ候ひ事し 葉 花鳥の院の御事の候
呉 白河の葉室をとかく思ひし事はさまざま思ひより候ひて御中の
中院のみかたにとも候へとも
大かたの御うしろはいまれ申して、はまさに申しかたく思ひやられ候やら
秋 悪宮の御うし候はいは葉の御結なくてはと思ひ候ふとも